

多賀城市文化財調査報告書第112集

多賀城市内の遺跡 1

—平成22年度ほか発掘調査報告書—

平成25年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡や多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約1/4にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であります。このことから、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用することはもとより歴史の解明に資する調査に努めているところです。

本書は、平成22年度に実施した留ヶ谷遺跡、八幡館跡と、平成5～7年度にかけて実施した大日南遺跡の3遺跡の調査成果を収録したものです。このうち、大日南遺跡は平成5年度の試掘調査によって新たに発見された遺跡であり、13世紀から16世紀にかけて、武士階級の屋敷跡が連続して営まれていたことが明らかとなりました。本市の中世史を解明する上で貴重な発見であり、今後の研究に大きく寄与するものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成25年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

例　　言

- 1 本書は、平成5・6年度及び平成22年度に市単独事業で実施した調査成果と、平成7年度に受託事業で実施した調査成果をまとめたものである。
- 2 平成5・6年度の市単独事業及び平成7年度の受託事業は、高橋土地区画整理事業に伴い実施した調査である。本報告では代表的な遺構のみを記載し、概略的に報告するものである。
- 3 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの連続番号である。
- 4 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土地標「平面直角座標系X」を用いている。なお、東日本大震災の影響により経緯度が大きく変動していることが明らかであるが、今回収録した調査はいずれも震災前に実施したものであることから、変動前の数値をそのまま利用している。
- 5 挿図中の高さは標高値を示している。
- 6 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
- 7 本書の執筆は担当職員の協議のもと、I・IVを武田健市、IIを島田敬、IIIを相澤清利が担当し、編集は武田が行った。また、遺構・遺物の図版作成等は各担当者が行った。
- 8 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。

S B : 建物 S A : 柱列 S E : 井戸 S D : 溝 S K : 土壌 P i t (P) : 小穴
S X : その他の遺構

目　　次

I	遺跡の立地と環境	1
II	留ヶ谷遺跡第6次調査	3
III	八幡館跡第5次調査	5
IV	大日南遺跡第1～3次調査	7

調査要項

1 調査主体 多賀城市教育委員会

教育長 菊地 昭吾

2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長 鈴木 典男 (平成23年11月～)

(各調査要項)

No.	遺跡・調査名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	留ヶ谷遺跡 第6次調査	留ヶ谷一丁目353-1	平成22年6月29日	4 m ²	島田 敬
2	八幡館跡 第5次調査	八幡二丁目25-7	平成22年9月30日 ～10月1日	6 m ²	相澤 清利 畠山未津留
3	大日南遺跡 第1次調査	高橋四丁目 (旧字名) 高橋字大日南・門間田・大日北 ・耳取北・耳取南・奈賀済・浜居場	平成6年2月7日 ～2月26日	3,000m ²	瀧口 卓 石川 優英 島田 敬 相澤 清利 武田 健市 鈴木 孝行 菊池 豊
			平成6年11月1日 ～1月20日	11,000m ²	瀧口 卓 石川 優英 武田 健市 鈴木 孝行 菊池 豊
			平成7年4月1日 ～8月31日	5,700m ²	武田 健市 鈴木 孝行 菊池 豊 伊藤 浩 山川 純一

3 調査協力者 UQコミュニケーションズ株式会社、多賀城市高橋土地区画整理組合

I 遺跡の立地と環境

多賀城市の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から伸びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

以下、本書に収録した遺跡の概略について述べる。

八幡館跡は市中央部にある標高6～13mの低丘陵に立地し、東西約300m、南北約200mの広さを有している。安永3年の八幡村風土記御用書出には、「一古館一 御仮屋後口古館 高南七間 北四間 縦四十四間 横三十六間 右ハ伊沢四郎様家景御家土八幡兵庫居館之由申伝候事」と記載があり、八幡氏の居館として伝えられていたことが知れる。これまでの調査では、中世城館に伴う大規模な空堀や溝跡のほか、奈良・平安時代の堅穴住居を確認している。

留ヶ谷遺跡は市中央部にある標高20m前後の丘陵上に位置しており、東西約150m、南北約300mの広さを有している。平安時代から近世にかけての複合遺跡であり、これまでの調査で平安時代の堅穴住居跡をはじめ、土壘・溝で囲まれた館跡を確認している（註1）。

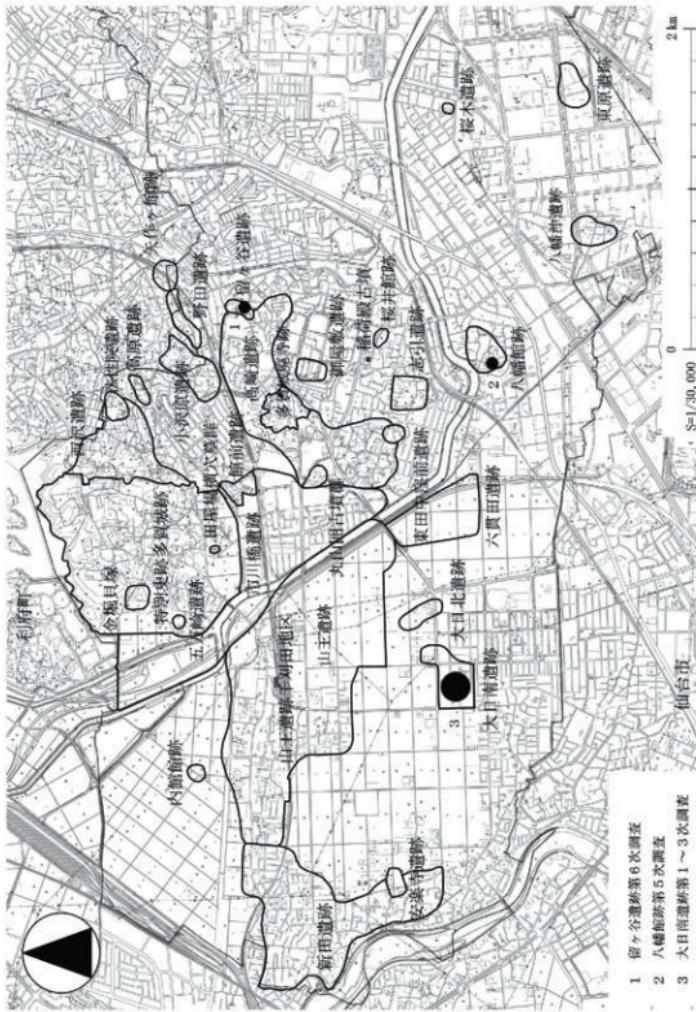
大日南遺跡は市南西部に位置している。現在の住居表示でみると多賀城市高橋四丁目を中心とした範囲にあたる。標高3～4mの自然堤防上にあり、遺跡の現況は宅地となっている。昭和22年に撮影された航空写真には、本遺跡北側100～200m付近で東西に延びる大規模な旧河道の痕跡を確認することができる。この埋没河川が中世以前の七北田川（冠川）であり、多賀城市新田字安楽寺・閑合付近で東に流路を変え砂押川と合流し、七ヶ浜町湊浜河口から太平洋に注いでいたと推測されている。これまでの調査で、大規模な区画溝に囲まれた中世の屋敷跡を発見している。



第1図 多賀城市の位置

註1：発見した館跡については、中世に構築されたものを近世に修築して使用したものと考えている。

第2図 調査地位置図



II 留ヶ谷遺跡第6次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、留ヶ谷一丁目地内における開発に伴うものである。平成22年6月10日に申請者より留ヶ谷遺跡での無線通信基地局建設工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、通信アンテナ設置にあたり幅2m、長さ2m、最深3mの掘削を施すというものである。当該地の西側約30mでは、留ヶ谷遺跡第1次調査が実施され、館跡に伴う土壘と溝跡が発見されている。さらに、当該地方向に西方から延びてくる土壘状の高まりが観察できることから、これらの遺構への影響が懸念された。このため、発掘調査が必要であることを申請者に対し説明し、承諾が得られたことから、6月29日に現地調査の実施に至ったものである。

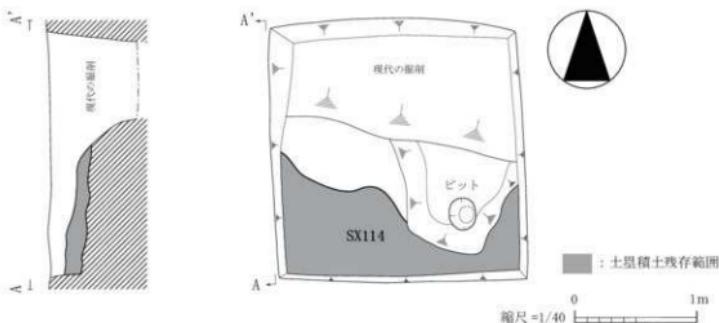


第1図 調査区位置図

2 調査成果

SX114土壘

東西方向の土壘の東端部付近にあたると推定される。北側が現代の掘削のため失われており、さらに上部も削平のため基底部付近がわずかに残存するにすぎない。岩盤上ににぶい黄褐色によって積土されており、その残存する厚さは10~15cmである。また、調査区南東部でピット1基が検出されているが、土壘積土との関係は不明である。遺物は出土していない。



第2図 調査区実測図



第3図 調査区周辺図



土壌積土検出状況（南より）



土壌積土検出状況（北より）



調査区西壁土層堆積状況（東より）

III 八幡館跡第5次調査

1 調査に至る経緯と経過と調査成果

本調査は、末の松山浄水場薬品注入室建設に伴う発掘調査である。平成22年5月19日に多賀城市水道事業管理者より当該地区における施設建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建設計画では基礎工事の際に $8.01\text{m} \times 6.08\text{m}$ 、深さ1.6mの掘削を行うことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。当該地区については、遺構の分布状況が不明なことから、確認調査を実施することとした。その後、9月21日に申請者より調査に関する依頼書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は9月30日より開始した。重機により表土（盛土）を除去したところ、深さ約60cmのところで地山層が検出された。この地山面で精査を行ったが、既存施設建設の際の搅乱が縦横に走っており、遺構・遺物は見られなかった。10月1日には、調査区の全景と土層断面の写真撮影を行い現地調査を完了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査地より仙台方面を望む
(東より)



調査区全景(南西より)



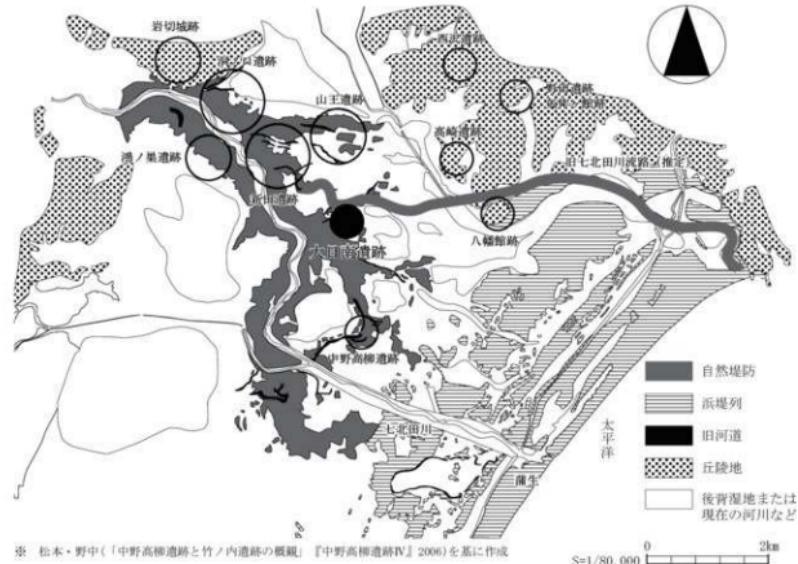
調査区東壁断面(西より)

IV 大日南遺跡第1～3次調査

1 大日南遺跡と周辺の遺跡

大日南遺跡は、平成6年1～2月にかけて実施した試掘調査によって新たに発見された遺跡である（多賀城市教育委員会1994）。試掘も含めこれまで12度の発掘調査を実施しており、第2次及び第4次調査の際にそれぞれ遺跡の範囲を拡大変更している。発見された遺構は、一边40～70m、幅3m前後の大規模な区画溝によって囲まれた中世の屋敷跡であり、これらが数区画隣接している状況が確認される。古代の遺物も僅かに認められるものの当該期の明確な遺構は確認されておらず（註2）、中世になって新たに開発された地区と捉えることができよう。周辺の自然堤防の広がりや発見された遺構の分布状況から判断すれば、遺跡の範囲は南西及び北東側に拡大する可能性が高いと考えられる。なお、本遺跡が立地する自然堤防の形成年代については 910 ± 100 yrBPとする見解が示されており（松本・野中2006）、古代及びそれ以前の明確な遺構が確認されない要因の一端を示すものといえよう。

ところで、中世以前の冠川（旧七北田川）については、本遺跡北側を東流し太平洋へ注いでいたとされる一方で、現在の七北田川と同様に仙台市蒲生へと流れる支流の存在も推測されている。この本流と支流に囲まれた沖積地が八幡氏の治めた「八幡庄」であるとされており（田中2002）、これに従えば本遺跡はその北西端に位置している。八幡氏については、平安後期以来の在地の豪族であり、12世紀前半に成立し



第1図 七北田川流域の地形と主な中世の遺跡

註2：試掘調査No.5トレーナーの縄16から完形の須恵系土器小型杯が1点出土している。この遺跡については埋土の振り下げを行わなかつたため詳細は明らかではないが、同位置で実施した第1次調査時には確認できなかつたことから非常に浅い構造であると考えられる。埋土が粗砂であったことから、河川の泥濁等によって生じた自然の堆みまたは小河川の可能性が高い。

たとされる説話集『今昔物語集』(巻第二十六「陸奥国府官大夫介子語第五」)のなかに記載のある「大夫ノ介」がこれにあたるとされている。本遺跡の東側丘陵部にある八幡館跡に居館を構えていたと考えられており、鎌倉時代には「陸奥介」、南北朝期以降は「八幡介」を称していた(註3)。その後、戦国時代には留守氏に服属し、その臣下に組み込まれていることが知られている。

一方、本遺跡周辺で確認された中世の遺跡を挙げると、北側の自然堤防上に西から洞ノ口・新田・山王遺跡、東側の丘陵部には北から西沢・高崎遺跡、八幡館跡がある。洞ノ口・新田・山王遺跡は鎌倉時代には留守氏が管轄する国府直轄の公用名に含まれており、洞ノ口遺跡周辺には多賀国政府を求める見解も示されている(斎藤1992)。新田遺跡については12世紀頃から屋敷が営まれるようになり、出土遺物などから国衙在官人の居館跡と考えられている。これらの屋敷跡は室町・戦国時代になるとさらに大規模な区画溝を伴うものへと変化し、概ね16世紀末頃には廃絶している。なお、留守氏は建久元年(1190)に陸奥国守職に任命された伊沢家景を祖としており、觀応2年(1351)の岩切城の合戦で一時没落するものの、中世全般を通してこの地を所領としていたことが明らかとなっている。丘陵部の八幡館跡は前述したとおり八幡氏の居館と考えられており、高崎遺跡では八幡氏との関係が推測される武士階級の屋敷跡が発見されている。これらの屋敷も新田・山王遺跡同様16世紀末頃には廃絶していることから、天正18年(1590)に留守氏が黒川郡大谷城へ移転するのに伴い臣下も従つたものと推測されている。

2 調査に至る経緯

多賀城市南西部に位置する高橋地区周辺は、国道45号線やJR仙石線の沿線にあることから、仙台市のベッドタウンとして早くから宅地化が進んだ地域である。本調査区はこれまで周知の埋蔵文化財として登録されていなかったものの、新田遺跡と同様に七北田川沿いに形成された自然堤防上に位置していることや、昭和22年に撮影された航空写真より人工的な区画溝と考えられる痕跡が認められていたため、かねてより中世もしくはそれ以前の遺跡の存在が推測されていた。したがって、宅地化の進展に対応するためにも早急に埋蔵文化財の有無を確認する必要性が生じていた。

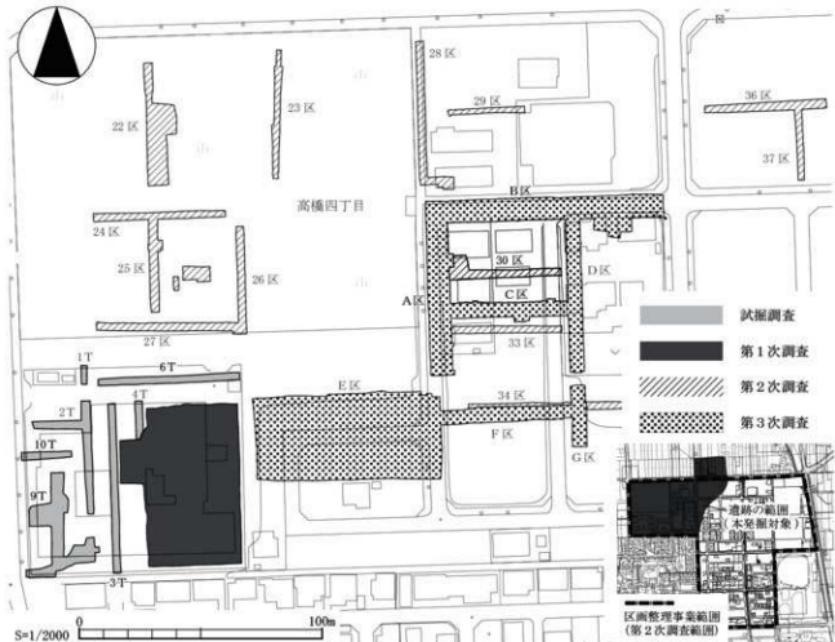
このような状況の下、水田城が広がっていた高橋四・五丁目地内(旧高橋字大日南・大日北・門間田・耳取南・耳取北・奈賀斎・浜居場)において、区画整理を行い宅地化する計画が立ち上がってきた。本件に関しては計画段階より地権者に対して試掘調査の重要性を訴えたこともあり、区画整理組合より平成5年11月24日付けで地権者全員の承諾書と発掘調査に係る依頼書の提出を受けた。しかし、この計画で示された範囲が43ヘクタールと広大であったため、試掘調査も含め3カ年にわたる長期間の調査となつた。

3 調査成果

(1) 層序

現在の水田耕作土(I層)を除去すると直ちに浅黄色砂質土やにぶい黄色砂質土の遺構検出面(II層)が現れる。II層上端の標高値は3.5~3.6m、層厚は50~60cmである。なお、この下層については平成6年度に実施した第2次調査の結果、黒褐色の亜泥炭層が厚く堆積していることが判明している。遺構・遺物が全く確認されなかったことから、本発掘調査の対象から外している。

註3:「陸奥介」は平安時代後期以来の在地豪族の系譜とされるが、「八幡介」は嘉祥元年(1235)に下野国栗田郡保田庄から八幡に移住した保田家長を祖とする見解と『宮城縣史1(古代中世史)』(1958)、建武新政期に所在地の八幡を取り「八幡介」を称するようになったとする見解(『多賀城市史1(原始・古代・中世)』1997)がある。



第2図 調査区配置図

(2) 発見遺構と遺物

掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壤、墓跡等を発見した。

掘立柱建物跡は第1次調査区中央部で2棟、第3次調査A・E・F区で19棟確認した。第2次調査26・30区、第3次調査B・C区でも多数の柱跡を確認したが、建物跡として組み合わせることができなかつた。井戸跡は第1・3次調査で15基確認した。第2次調査区では埋土の掘り下げを行っていないことから、井戸か土壤の判断ができなかつたものも多く存在する。溝跡、土壤は各調査区で多数確認している。溝跡の多くは屋敷を区画するものであり、幅3mを超す大規模なものと、幅1m前後的小規模なものがある。墓跡は第3次調査E区西側で発見したものであり、全て土壤墓である。

以下、これら発見した遺構のうち、主なものについて記載する。

【掘立柱建物跡】

S B 1・2 掘立柱建物跡（第3・37図）

第1次調査区中央部で発見した桁行4間、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡である。SD51と重複しており、それよりも新しい。これらは規模や位置関係から同じ建物跡の変遷と考えられるが、新旧関係を確認することができなかつたことから、北側のものをS B 1、南側のものをS B 2として記載する。

S B 1：北側柱列で柱痕跡、南側柱列で柱抜取り穴を確認した。柱抜取り穴のうち、南東隅柱穴と南西

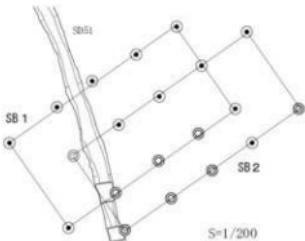
隅柱穴には柱のあたり痕跡が認められた。方向は北側柱列で測ると東で34度58分北に偏している。規模は桁行が北側柱列で8.11m、柱間は西より2.40m、1.72m、2.01m、1.98mであり、梁行は東妻で3.98mである。柱穴の平面形はやや歪んだ方形または円形であり、規模は南西隅柱穴で一辺34cm、深さ35cmである。埋土は、黄灰色粘質土が混入する浅黄色砂質土が主体であるが、南西隅柱穴のみ黒褐色粘質土である。柱痕跡は直径12～18cmの円形であり、埋土は黒褐色粘土である。柱抜取り穴は柱穴全体または大部分を破壊しているものと、柱穴の中央付近で柱痕跡状に確認できるものがあり、後者は柱のあたり痕跡が残るものである（註4）。埋土は浅黄色砂質土が多量に混入する灰黄色砂質土、黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

S B 2：北東隅柱穴と北側柱列東より1・2間目柱穴、南側柱列東より1間目柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した。柱抜取り穴のうち、北側柱列東より3間目柱穴には柱のあたり痕跡が認められた。方向は北側柱列で測ると東で約35度北に偏している。規模は桁行が北側柱列で約8.6m、柱間は東より2.18m、2.00m、2.09m、約2.3mであり、梁行は東妻で約3.7mである。柱穴の平面形はやや歪んだ方形または円形であり、規模は北東隅柱穴で直径34cm、深さ30cmである。埋土は、浅黄色砂質土が混入する黒褐色粘質土である。柱痕跡は直径12cmの円形であり、埋土は黒褐色粘土である。柱抜取り穴は柱穴全体を破壊しているものと、柱穴の中央付近で柱痕跡状に確認できるものがあり、後者は柱のあたり痕跡が残るものである。埋土は浅黄色砂質土が多量に混入する黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

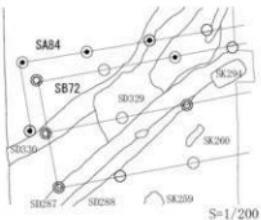
S B72掘立柱建物跡、S A84柱列跡（第4・38図）

第3次調査A区南部で発見した建物跡と柱列跡であり、方向や位置関係から同時期のものと判断した。S A85、SD329・287・330と重複し、S A85よりも古く、SD329・287・330よりも新しい。

S B72は桁行3間以上、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡であり、棟通り下にも側柱と同間隔で柱穴が認められる。柱穴は10基検出しており、北側柱列西より2間目柱穴で柱痕跡、西妻及び棟通り下柱列西より2間目柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は北側柱列で測ると東で約11度北に偏している。規模は、桁行が北側柱列で7.8m以上、柱間は西より約2.7m、約2.8m、約2.3mであり、梁行は西妻で約4.0m、柱間は北より約1.9m、約2.1mである。柱穴の平面形はおよそ方形であり、規模は北側柱列西より2間目柱穴で長辺18cm、短辺16cm、深さ26cmである。埋土は黄灰色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土や炭化物が混入している。柱痕跡は直径8～10cmの円形であり、埋土は黒色粘土である。柱抜取り穴は、柱穴の全てまたは大部分を破壊している。埋土は褐色粘質土や黒褐色粘土が主体であり、浅黄色砂質土が多く混入している。遺物は出土していない。

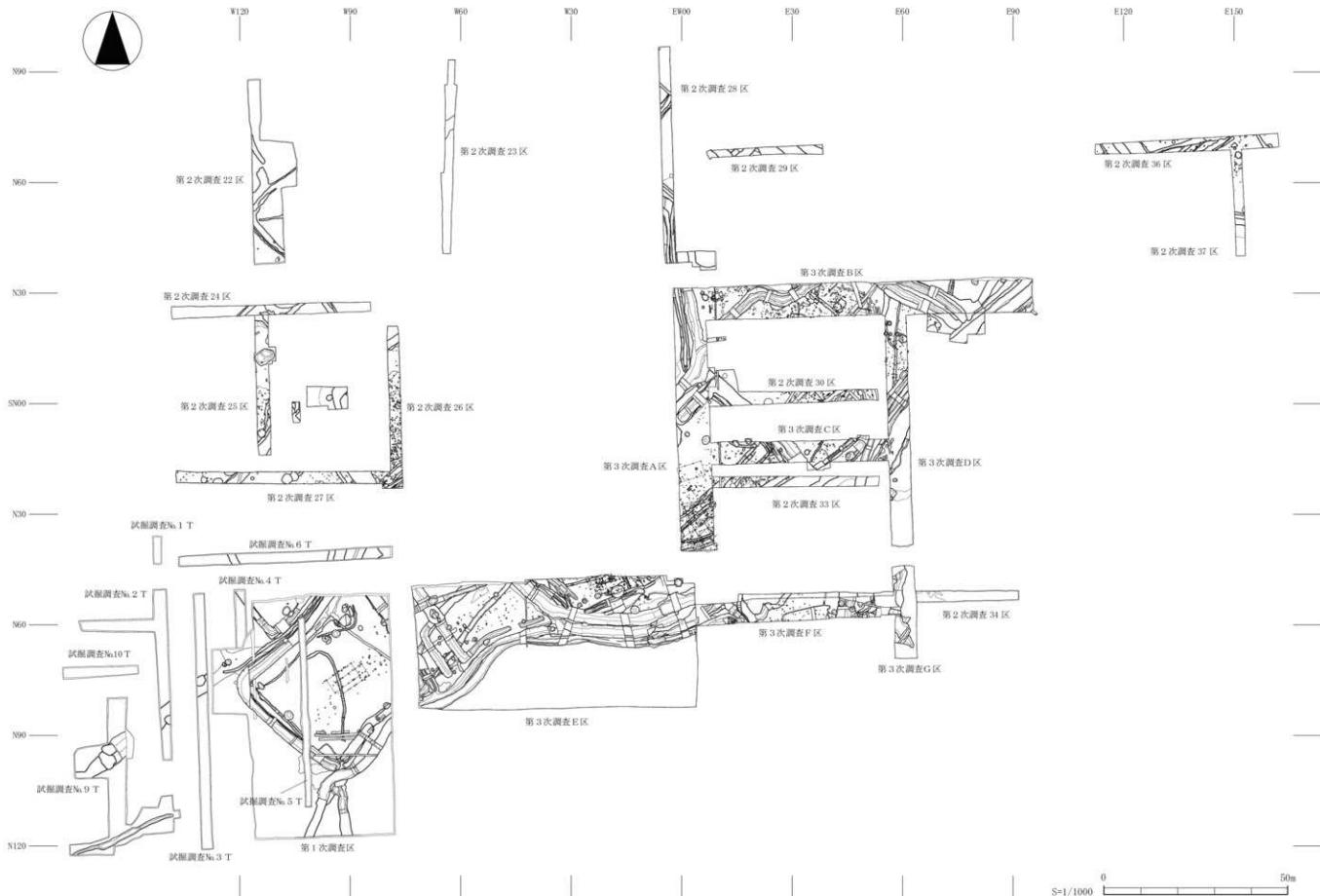


第3図 SB1・2模式図



第4図 SB72・SA84模式図

註4：柱痕跡状に残る柱抜取り穴については、埋土に浅黄色砂質土（II層）が多く混入していることから、ほぼ垂直方向に柱を抜き取った痕跡と考え、「柱のあたり痕跡」を残すものと捉えている。なお、建物跡模式図中の●は柱痕跡または柱のあたり痕跡を確認したもの、○は柱抜取り穴を確認したものの、△は柱痕跡や抜取り穴が確認できなかつたものである。



第5図 第1～3次調査遺構配置図

S A84は、S B72の北側柱列及び西妻に沿って発見した柱列である。S B72北側の東西柱列で4間分、西側の南北柱列で1間分を確認した。柱穴は5基検出しており、東西柱列西より3間目柱穴を除く全ての柱穴で柱痕跡を確認した。方向は東西柱列で測ると東で約10度北に偏している。規模は東西7.4m以上、柱間は西より2.59m、2.52m、約2.3mであり、南北は2.67mである。柱穴の平面形は歪んだ方形または円形であり、規模は南北柱列南端の柱穴で長径35cm、短径30cm、深さ33cmである。柱痕跡は直径10～16cmの円形である。遺物は出土していない。

S B73掘立柱建物跡、S A85柱列跡（第6・38図）

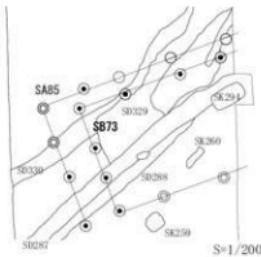
第3次調査A区南部で発見した建物跡と柱列跡であり、方向や位置関係から同時期のものと判断した。S B72、S D287・288・329・330と重複し、それらよりも新しい。

S B73は桁行4間以上、梁行3間の東西棟掘立柱建物跡である。柱穴は9基検出しており、南側柱列西より1・2間目柱穴で柱抜取り穴、それらを除くすべての柱穴で柱痕跡を確認した。方向は北側柱列で測ると東で19度37分北に偏している。規模は桁行が北側柱列で6.02m以上、柱間は西より1.92m、2.36m、1.74mであり、梁行は西妻で4.47m、柱間は北より1.76m、1.23m、1.48mである。柱穴の平面形は方形または歪んだ方形であり、規模は北西隅柱穴で長辺23cm、短辺18cm、深さ34cmである。埋土は黒褐色・褐灰色粘質土が主体であり、浅黄色砂質土やオリーブ黄色粘質土が混入している。柱痕跡は直径10～14cmの円形であり、埋土は黒色粘土である。柱抜取り穴は、柱穴の全てを破壊している。埋土は褐灰色粘質土や黒色粘土が主体であり、浅黄色砂質土が多く混入している。遺物は出土していない。

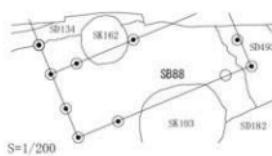
S A85はS B73の北側柱列及び西妻に沿って発見した柱列である。S B73北側の東西柱列で4間分、西側の南北柱列で3間分を確認した。柱穴は8基検出しており、東西柱列西より1間目柱穴と南北柱列北より2・3間目柱穴で柱痕跡、北西隅柱穴と南北柱列北から1間目柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は東西柱列で測ると東で約19度北に偏している。規模は東西7.9m以上、柱間は西より約1.9m、約1.5m、約2.2m、約2.3mであり、南北は約5.3m、柱間は北より約1.7m、約1.5m、2.05mである。柱穴の平面形は歪んだ方形または円形であり、規模は南北柱列北より2間目柱穴で一辺20cm、深さ24cmである。埋土は、浅黄色砂質土が多く混入する黒色粘質土またはぶい黄褐色砂質土である。柱痕跡は直径10～14cmの円形であり、埋土は炭化物が僅かに混入する黒褐色・褐灰色粘土である。柱抜取り穴には柱のあたり痕跡を残すものと柱穴の大部分を破壊するものがある。埋土は、浅黄色砂質土やオリーブ黄色砂質土、炭化物が混入する黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

S B88掘立柱建物跡（第7・42図）

第3次調査E区北東部で発見した東西5間（推定）、南北4間以上の掘立柱建物跡である。S D134・493、S K103と重複し、S K103よりも古く、S D134・493よりも新しい。南より2間目の東西柱筋上にも柱穴を確認しており、間仕切りがあったものと推測される。柱穴は10基検出しており、南側の柱列東より1間目柱穴を除く全ての柱穴で柱痕跡を確認した。方向は南側の柱列で測ると東



第6図 S B 73・S A 85 模式図



第7図 S B 88 模式図

で22度3分北に偏している。規模は南側の柱列で総長7.69m、柱間は西より1.70m、約4.9m（3間分推定）、約1.1mである。西側の柱列は総長4.14m以上、柱間は南より1.25m、1.59m、1.30mである。柱穴の平面形は歪んだ方形または円形であり、規模は南側の柱列西より1間目柱穴で一边27cm、深さ32cmである。埋土は褐灰色粘質土や暗黃灰色砂質土が主体であり、黒色粘土や浅黃色砂質土、炭化物が混入している。柱痕跡は直径12～16cmの円形であり、埋土は炭化物が混入する黒色または褐灰色粘土である。遺物は出土していない。

S B89掘立柱建物跡（第8・42図）

第3次調査E区北東部で発見した東西3間、南北3間以上の掘立柱建物跡である。SD134、SK103と重複し、それよりも新しい。柱穴は6基検出しており、南側の柱列西より1間目と西側の柱列南より2間目柱穴で柱痕跡、南側の柱列西より2間目柱穴で柱のあたり痕跡のある柱抜取り穴を確認した。方向は南側の柱列で測ると東で約28度北に偏している。規模は南側の柱列で総長約4.9m、柱間は西より約1.3m、1.90、約1.7mであり、西側の柱列では総長3.5m以上、柱間は南より約1.9m、約1.6mである。柱穴の平面形は歪んだ方形または円形であり、規模は西側の柱列南より2間目柱穴で一边25cm、深さ45cmである。埋土は浅黃色砂質土やぶい黄褐色砂質土が多く混入する黒色粘土であり、炭化物が僅かに混入するものもある。柱痕跡は直径12～18cmの円形であり、埋土は炭化物が混入する黒色または褐灰色粘土である。柱のあたり痕跡を残す柱抜取り穴は、柱穴の大半を破壊している。埋土は黒色粘土や炭化物が混入する褐灰色粘質土であるが、柱状の痕跡が認められる底面付近では粘性の強い褐灰色粘土である。遺物は出土していない。

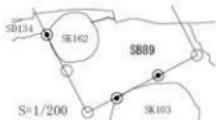
【井戸跡】

S E42井戸跡（第9・37図）

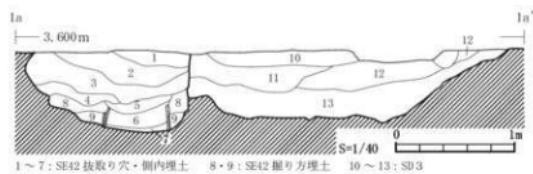
第1次調査区西部で発見した井戸跡であり、掘り方の底面やや南側に円形の曲物が据えられていた。SK52、SD3と重複し、SK52よりも古く、SD3よりも新しい。曲物の規模は直径約51cm、高さ約20cmである。曲物側内の埋土は灰色粘質土であり、植物遺体が薄層状に認められる（6・7層）。掘り方は、上面が抜取り穴によって破壊されているため残存状況が悪く、長軸約1.1m、短軸0.8～0.9m、深さ約0.3mを残すのみである。壁は北側底面付近に段が形成される以外は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は曲物付設部分が周囲より丸みを帯び僅かに窪んでいる。埋土は2層に分けることができる（8・9層）。8層が灰色砂質土、9層がオリーブ灰色粗砂である。

S E361井戸跡（第10・40図）

第3次調査C区東部で発見した素掘りの井戸跡である。SD360・363と重複し、SD360よりも古く、SD363よりも新しい。平面形は円形であり、規模は直径約2.8m、深さ約2.1mである。壁は概ね垂直であるが、上方は外に広がりながら非常に緩やかに立ち上がっている。底面は平坦である。埋土は7層に分けることができる。1層が黒色粘土、2層が炭化物層、3・4層が黒褐色粘土、5層が褐灰色粘土、6層が



第8図 SB 89 模式図



第9図 S E 42, SD 3 断面図

灰色粘土、7層が黒褐色砂質土である。このうち4層にぶい黄色砂質土、5層に灰色粘土が多量に混入している。遺物は白磁碗、無軸陶器擂鉢が出土している。

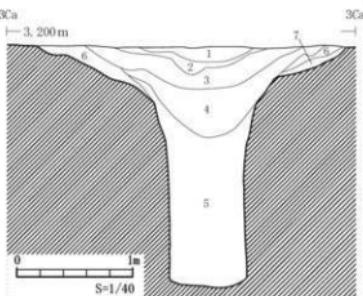
【溝跡】

S D 5・13・14・15・21・25・53区画溝跡・S X54・

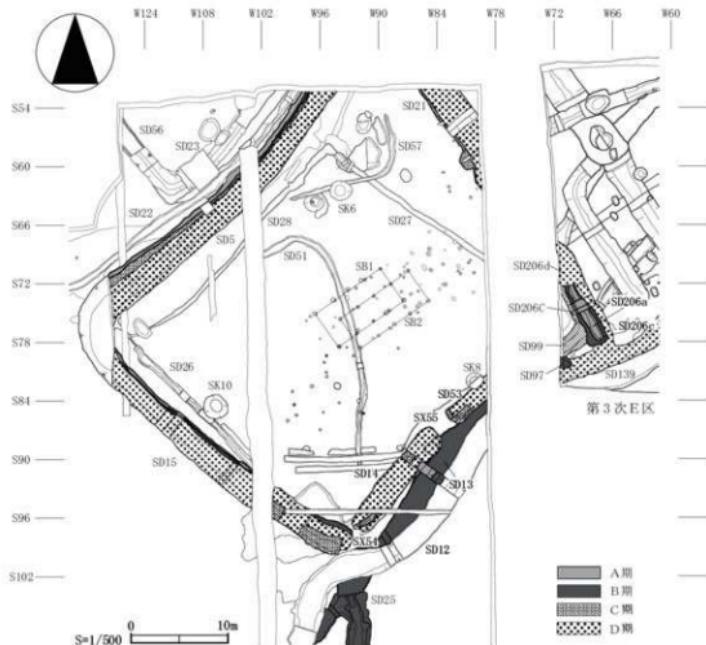
55土橋跡(第11・12・37図)

第1次調査区全城で確認した方形の区画溝跡であり、北西辺をSD 5、南西辺をSD 15、南東辺をSD 13・14・53、北東辺をSD 21、南端部で南に延びる溝跡をSD 25とした。このうち遺構の規模や位置、新旧関係から、SD 21は東側の第3次調査E区で発見したSD 206と、SD 53は同じくSD 139と同一の溝跡であると考えられる。区画の範囲は北西辺が約35m以上、南西辺が約37m、南東辺が約37m、北東辺が約35m以上であり、区画全体で4時期(A→D期)の変遷を確認した。SX 54土橋は各時期を通して屋敷南端部に設けられており、A・B期が南西方向、C・D期が南東方向に開いている。SX 55土橋は南東辺に設けられたものであり、C・D期に認められる。以下、最も新しいD期遺構の概要を記載する。

D期: SD 5 d・15 d・14 b・53 b・21 b溝跡、SX 54 d・55 b土橋を発見した。いずれもC期遺構と



第10図 S E 361断面図

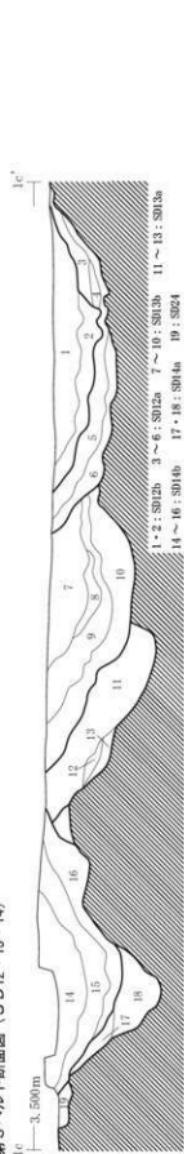


第11図 S D 5ほか区画溝跡平面図

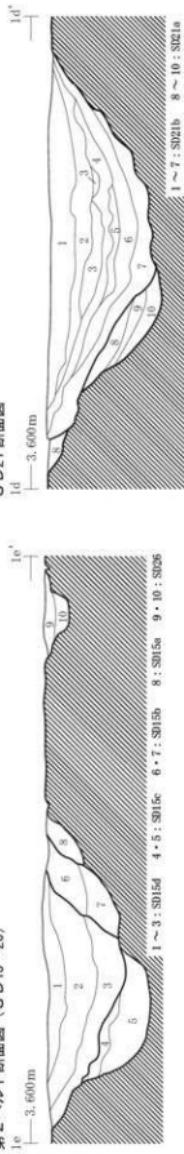
第1ベルト断面図 (SD 5・22・23)



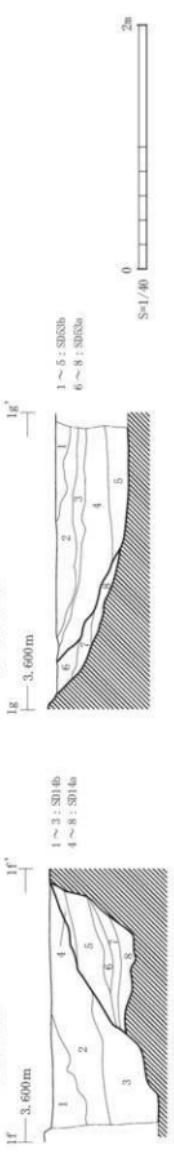
第3ベルト断面図 (SD 12・13・14)



第2ベルト断面図 (SD 15・26)



SD 14 北端部断面図



SD 15b

SD 15a

第12図 第1次調査区面溝跡断面図

およそ同位置で造りかえられている。南東辺を区画する SD53b と SK8 が重複しており、SK8 が新しい。

SD5d は北で約44度東に偏しており、規模は幅2~2.8m、深さ約0.4mである。壁は北西側の上位に段が形成されているものの、概ね緩やかに立ち上がっている。底面にはやや凹凸が認められ、南西から北東に向かって緩やかに下っている。埋土は2層に分けることができる（第12図第1・3ベルト断面図1・2層）。1層は灰黄褐色砂質土、2層は灰黄色粘質土である。

遺物は無釉陶器甕、瓦質土器擂鉢、茶臼、砥石が出土している。

SD15d は西で約41度北に偏しており、規模は幅2~2.9m、深さ約0.7mである。壁は北東側が比較的急に立ち上がっているが、南西側は非常に緩やかである。底面は丸みを帯びて窪んでおり、北西辺を区画する SD5d 底面より約0.2m深く掘り込まれている。埋土は3層に分けることができる（第12図第2ベルト断面図1~3層）。1層は灰黄褐色砂質土、2層は褐灰色粘質土、3層は褐灰色粘土である。

遺物は茶臼（下臼）が出土している。

SD14b は東で約51度北に偏しており、規模は長さ約13m、幅2.4~2.7m、深さ約0.7mである。壁にはやや凹凸があるものの、緩やかに立ち上がっている。底面は丸みを帯びて窪んでおり、南西から北東に向かって緩やかに下っている。埋土は3層に分けることができる（第12図第3ベルト断面図14~16層）。14層は灰白色砂質土と灰色砂質土、15層は黄灰色砂質土と灰色砂質土がそれぞれ互層状に堆積している。16層は褐灰色粘質土である。

SD53b は長さ5m以上、幅1.8m、深さ0.6mである。埋土は5層に分けることができる（第12図SD53南端部断面図1~5層）。1層は灰黄褐色砂質土、2層は褐灰色粘質土、3層にはい黄褐色砂・粘土の互層、4層は浅黄色砂質土が混入する褐灰色粘質土、5層は浅黄色砂質土や粗砂が混入する黒褐色粘質土である。

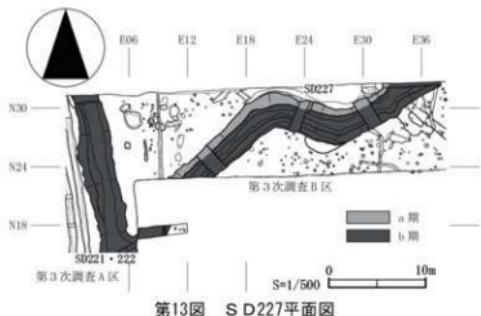
SD21b は北で約37度西に偏しており、規模は長さ10.5m以上、幅3.2~3.3m、深さ約0.9mである。壁は概ね緩やかに立ち上がっているが、底面には凹凸が多く認められる。埋土は7層に分けることができる（第12図SD21断面図1~7層）。1層が褐灰色砂質土、2~6層が褐灰色粘質土、3層が灰色粘質土、4層が灰白色砂質土、5層が黄灰色粘質土、7層が灰色粘質土である。このうち3層に粗砂、5~6層に植物遺体が薄層状に認められる。

SX54d は SD15d と SD14d の間にある幅0.7~1mの空閑地が相当する。C期土橋と比較すると、およそ半分ほどの規模に縮小されている。

SX55b は SD14b と SD53b の間にある、幅約1.9mの空閑地が相当する。

SD227区画溝跡（第13・14・39図）

第3次調査B区西部で発見した、北東-南西方向の区画溝跡である。中央付近で一部東西方向に屈曲し、鉤状の形態となっている。規模や位置関係から、A区 SD221・222区画溝跡と同時期のものであることが明らかである。SD273・314・425、SK274と重複し、それらよ



第13図 SD227平面図

りも新しい。同位置で2時期の変遷（a→b期）を確認している。

S D227 aはb期掘削の際にほとんどが破壊されている。規模は幅1.4m以上、深さ約0.6mである。埋土は4層に分けることができる（9～12層）。9・10層が黒褐色粘土、11層が黒色粘土、12層が灰色粘土である。遺物は出土していない。

S D227 bはa期とほぼ同位置で造り替えたものである。方向は屈曲部の南側で測ると東で約42度北に、北側で測ると約29度北にそれぞれ偏している。規模はA区S D221・222区画溝の接続部分から測ると長さ38m以上、幅2.1～2.8m、深さ0.9～1mである。壁は比較的緩やかに立ち上がりっているが、南辺上端部には検出面から深さ20cmの位置に、幅0.7～1.1mの平坦面が形成されている。底面にはほとんど凹凸はない、南西から北東に向かって約20cm下っている。埋土は7層に分けることができる（1～8層）。1・2・7層が黒褐色砂質土、それ以外は黒色または黒褐色の粘土・粘質土が主体である。このうち1層には黒褐色粘土、2層には黄褐色砂が薄層状に認められる。また、南側の壁際では黄灰色または黄褐色砂質土（地山崩壊土）が混入している。

遺物は青磁碗、無軸陶器擂鉢・甕、瓦質土器擂鉢、曲物、古錢（永楽通寶）、茶臼（下臼）、石製硯未製品が出土している。

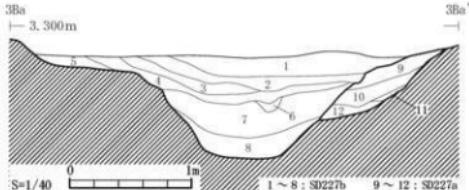
S D92・105溝跡、S X93土橋跡（第15・16・19・42図）

第3次調査E区北半部で発見した区画溝跡である。S X93土橋を境に、東側をS D92、西側をS D105とした。S D94・139・140～142・179～182、S K111と重複し、それよりも新しい。S D105は東半部が東西方向、西半部は北に彎曲しながら延びている。S D92は北東方向に向かって延びており、規模や位置・新旧関係からA区S D220、C区S D233、第2次調査30区S D61や33区S D58と一連の溝跡と捉えている。ほぼ同位置で2時期（A→B期）の変遷を確認した。

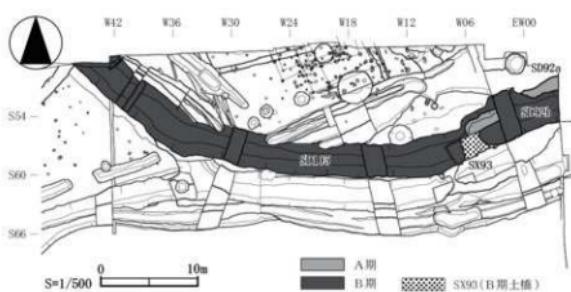
A期：S D92 a、S X93 aを発見した。大部分がB期によって破壊されており、残存状況は悪い。

S D92 aは幅3.2～3.5m、深さ約1mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は2層に分けることができる（第19図第1ベルト9・10層）。いずれもオリーブ黒色であり、10層には灰色砂が多量に混入している。遺物は出土していない。

S X93 aは、西側がS D105によって大きく破壊されている。幅員は2m以上であったと推測される。区画溝とほぼ同じ幅で0.5～0.6m掘り窪められており、掘り窪められた底面とS D92 a底面との比高は約0.5mである。



第14図 S D227断面図



第15図 S D92・105、S X93平面図

B期：A期とほぼ同位置で造り替えたものであり、SD92b・105、SX93bを発見した。

SD92bは長さ9m以上、幅2.9～4.9m、深さ0.9～1mである。壁はほとんど凹凸がなく、緩やかに立ち上がっている。底面は丸みを帯びて窪んでおり、北東方向に向かって緩やかに下っている。埋土は6層に分けることができる（第19図第1ベルト3～8層）。3層は黄褐色砂質土、4層は黄褐色砂が多量に混入する黒褐色砂質土、5・6層は暗オリーブ褐色粘土、7層は黄褐色砂が薄層状に混入する暗灰黄色砂質土、8層は植物遺体が混入するオリーブ黒色粘土である。

SD105は長さ43m以上、幅3.6～4m、深さ約0.9mである。壁はやや凹凸があるものの、概ね緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸が多く認められ、東から西に向かって約20cm下っている。埋土は溝中央付近で4層に分けることができる（第19図第3ベルト6～9層）。6層は炭化物粒や浅黄色砂が僅かに混入する褐灰色砂質土、7

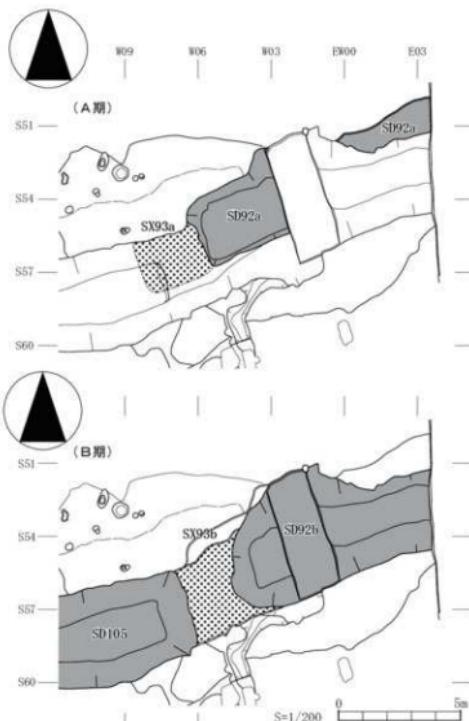
層は浅黄色砂が多量に混入するにぶい黄橙色砂質土、8層はにぶい黄色粘土が混入する黒褐色粘土、9層は炭化物粒が多く混入する黒色粘土である。

遺物は無釉陶器壺、瓦質土器鉢、ロクロかわらけ、漆器椀、草履、板・棒状木製品、不明木製品、板碑、茶臼、石鉢が出土している。

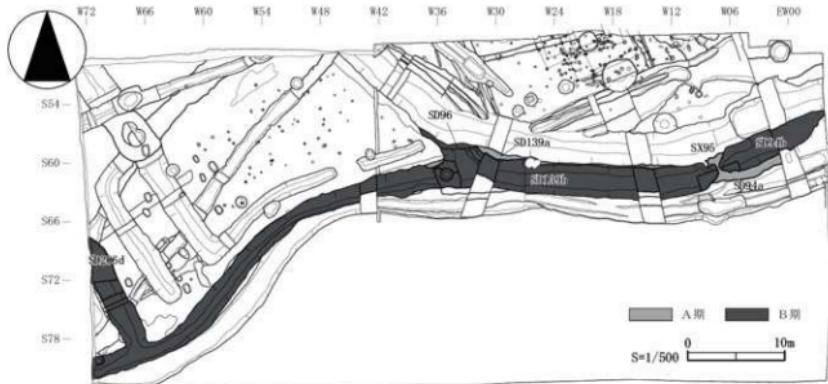
SX93bはa期をやや東に移動して造り替えたものである。a期にあった溝状の窪みを全て埋め戻して構築しており、規模は幅員約1.8mである。積土は6層に分けることができる（第19図第SX93土橋付近断面図8～13層）。8・10・11・12層は黒褐色粘土であり、8・10・11層に多量の浅黄色砂質土が混入している。9層は黒褐色粘土が混入する暗灰黄色粗砂、13層は灰黄褐色粘土である。

S D94・139溝跡、S X95土橋跡（第17・18・19・42図）

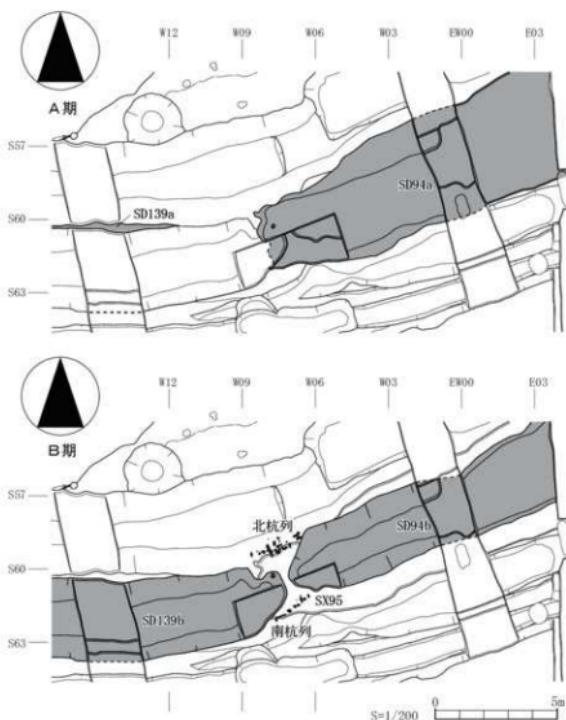
第3次調査E区中央部を横断する区画溝跡である。SX95を境に西側をSD139、東側をSD94とした。SD104・105・131と重複し、それらよりも古い。SD139は東半部が東西方向、西半部が北東～南北方向に延びており、中央部で北側に延びるSD96と、西端部で同じく北側に延びるSD206Dと接続している。また、遺構の位置・新旧関係から、第1次調査区SD53と一連の溝跡と考えられる。一方、SD94は緩やかではあるが北側に彎曲して延びており、F区SD366と同一の溝であることが明らかである。規模や位



第16図 SD92・105、SX93変遷図

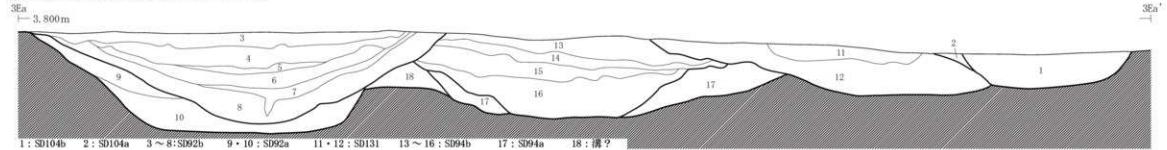


第17図 SD 94・96・139、SX95平面図

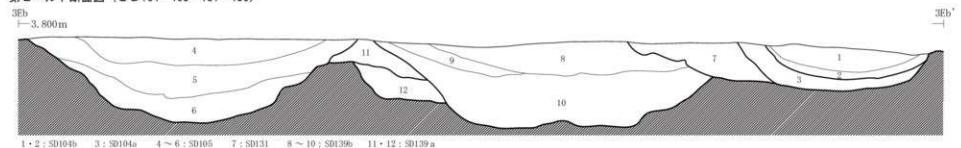


第18図 SD 94・139、SX95変遷図

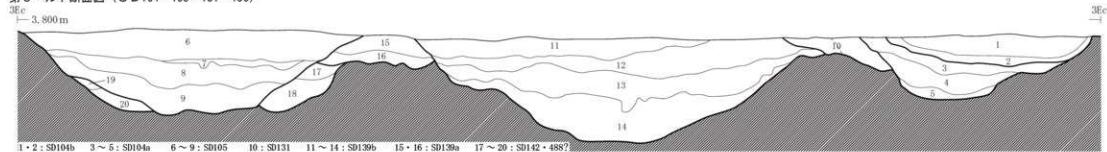
第1ベルト断面図 (SD92・94・104・131・139)



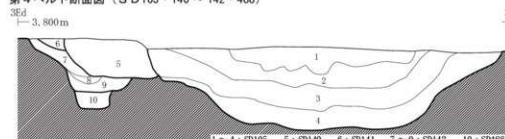
第2ベルト断面図 (SD104・105・131・139)



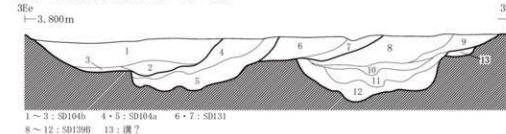
第3ベルト断面図 (SD104・105・131・139)



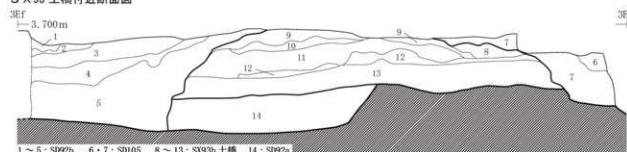
第4ベルト断面図 (SD105・140 ~ 142・488)



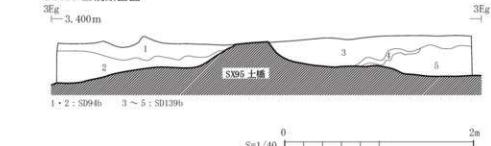
第5ベルト断面図 (SD104・131・139)



S X 93 土橋付近断面図



S X 95 土橋断面図



第19図 第3次調査E区区画溝跡断面図

置・新旧関係から、C区SD363・393・399、第2次調査33区SD60と一連の溝跡である可能性が推測される。いずれも2時期の変遷（A→B期）を確認している。

A期：SD94a、139aを発見した。

SD94aは上面の大部分がB期溝跡によって破壊されている。規模は幅3～3.8m、深さ約0.6mである。埋土は植物遺体が僅かに混入する黄灰色砂質土である。遺物は出土していない。

SD139aはほとんどがB期及びSD105によって破壊されおり、残存状況は悪い。規模は東端付近で深さ約0.7mであるが、SD96との接続付近では約0.4mと浅くなっている。埋土は2層に分けることができる（第19図第2ベルト11・12層）。11層は灰オリーブ色粘質土、12層は灰色粘質土である。遺物は出土していない。

B期：SD94b、139b、SX95を発見した。

SD94bは、a期を東に移動して造り替えたものである。規模は長さ12m以上、幅2.7～2.9m、深さ約0.9mである。壁には中位及び下位付近にそれぞれ段が認められるが、概ね緩やかに立ち上がっている。底面にはほとんど凹凸はなく、北東方向に向かって約20cm下っている。埋土は4層に分けることができる（第19図第1ベルト13～16層）。13層は黒褐色粘質土であり、黄褐色砂が多量に混入している。14・15層は黒色粘質土であり、14層に明黄褐色砂、15層には多量の炭化物粒が混入している。16層は植物遺体が僅かに混入する暗黄灰色粘土である。遺物は出土していない。

SD139bは、a期とほぼ同位置で造り替えたものである。規模は長さ70m以上、幅1.3～3.3m、深さ約0.7～1.1mであり、中央部のSD96より西側で規模がやや小さくなっている。壁は緩やかに立ち上がっているが、中位付近に段が認められる箇所もある。底面は東西両端からSD96との接続部に向かって緩やかに下っており、東端部と約20cm、西端部とは約30cmの比高がある。埋土はSD96との接続付近で4層に分けることができる（第19図第3ベルト11～14層）。11・13層は炭化物粒が混入する黄褐色粘質土であり、浅黄色砂や黄褐色砂が薄層状に認められる。12層は浅黄色砂が薄層状に多量に混入する褐灰色粘土、14層は暗緑灰色砂が混入するオリーブ黒色粘土である。

遺物は青磁碗、施釉陶器瓶子、無釉陶器擂鉢・甕、ロクロかわらけ、漆器椀、木製曲物・鍤、古銭（皇宋通寶・熙寧元寶・永樂通寶）、鉄釘、鐵鎌、板碑破片、石臼、輪羽口が出土している。

SX95はSD94b・139b間に設けられた土橋であり、幅員は約0.4mと極めて狭い。壁はSD94・139底面に向かって緩やかに下っており、土橋上面と溝底面との比高はそれぞれ40cm前後である。一方、土橋の南北両端部では、SD94・139の上幅と辺を合わせるように並べられた東西の杭列（南杭列・北杭列）を確認している。北杭列が約2.2m、南杭列が約1.7mであり、南北杭列間の距離は2.7～3mである。いずれも直径10cm前後の打ち込み杭であるが、杭同士の間隔に規格性は認められない。

SD140～142・118・179～182・488溝跡（第19・20・42図）

第3次調査E区中央部で発見した区画溝跡である。規模や埋土、重複関係などから、南西-北東方向のSD118・179・180・181・182と北西-南東方向のSD140・141・142・488がそれぞれ直角に接続していると考えられる。SD105、SK103、SX101と重複し、それらよりも古い。各溝跡の重複関係より5時期の変遷（A→E期）があると理解した。以下、最も新しいE期の概要を記載する。

E期：D期をやや南に移動して造り替えたものであり、南西-北東方向のSD118と北西-南東方向のSD140を発見した。このうちSD140は大部分がSD105によって破壊されており、残存状況は悪い。

S D118は中央付近で東に屈曲し、東西方向へ向きを転じている。方向は南西—北東方向が東で約39度北に偏しており、東西方向がほぼ東西の発掘基準線と一致している。規模は長さ26m以上、幅1.1～3m、深さ0.1～0.3mである。壁は僅かに凹凸が認められるものの、緩やかに立ち上がっており、底面は凹凸が多く、北東から南西に向かって約20cm下っている。埋土は2層に分けることができる。1層は炭化物が混入するにぶい黄褐色砂、浅黄色粘土が大量に混入している。2層は褐灰色粘土が僅かに混入する灰黄褐色土である。

遺物は無釉陶器甕、漆器碗、古銭（至道元寶）が出土している。

S D140は西で約41度北に偏しており、規模は長さ11m以上、幅1m以上、深さ0.4～0.6mである。壁は緩やかに立ち上がっており、中位付近に段が形成される箇所も認められる。底面には凹凸のある箇所も多くあり一様ではなく、南東から北西方向に向かって緩やかに下っている。埋土は明黄褐色砂質土が僅かに混入するオリーブ黒色粘土である。遺物は出土していない。

【土壤】

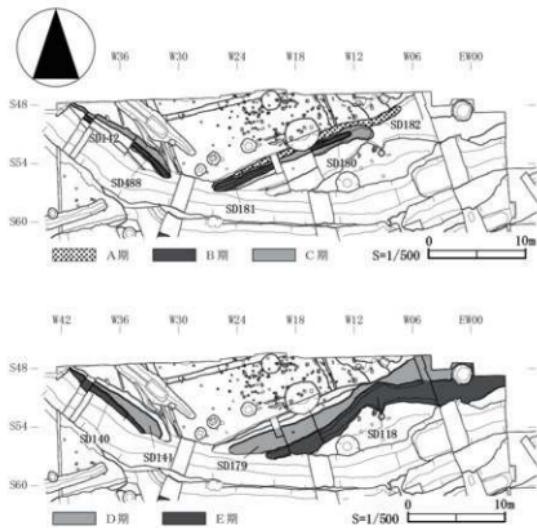
S K103土壤（第21・42図）

第3次調査E区東部で発見した土壤である。SD180・182と重複し、それよりも新しい。平面形は東西に長い円形であり、規模は長径約3.7m、短径約3.2m、深さ約1.1mである。壁は緩やかに立ち上がっており、底面は丸みを帯びて窪んでいる。埋土は5層に分けることができる（1～5層）。1層は固く締った明黄褐色砂質土、2層はにぶい黄褐色粘土が混入する黒色粘土、3層は炭化物・灰と藁・穀殻の互層、4・5層はオリーブ黒色粘土である。

遺物は白磁碗、青磁碗、無釉陶器甕、漆器碗・皿、木製盆・下駄・曲物・鍤、古銭（元符通寶）、輪の羽口、木簡が出土している。

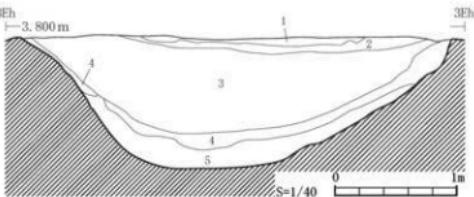
S K119土壤（第22・42図）

第3次調査E区東部で発見した土壤である。SD118と重複し、それよりも新しい。平面形は円形であ



第20図 S D140 ~ 142 · 118 · 179 ~ 182平面図

3Eh
—3,800 m
1
2
3
4
5
3Eh'
—
S=1/40
0 1m



第21図 S K103断面図

り、規模は直径約2.1m、深さ約0.7mである。壁はやや凹凸があるものの、緩やかに立ち上がっている。底面にも僅かに凹凸が認められ、丸みを帯びて座んでいる。埋土は5層に分けることができる（1～5層）。1～4層は黒褐色粘質土である。2層に木片が多く混入しているほか、3層には砂粒が薄層状に堆積している。5層は浅黄色砂質土が多量に混入するオリーブ黑色粘土であり、4層との層離面には糞状の炭化物の薄層が認められる。

遺物は施釉陶器花瓶、無釉陶器甕、板磚、漆器椀、木製品曲物、古錢（洪武通寶）が出土している。

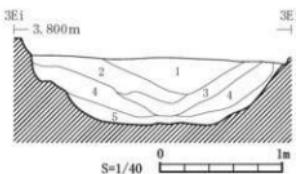
S X101土壤（第42図）

第3次調査E区北東部で発見した一辺約30cmの方形の浅い窪みである。SD179・180と重複し、それよりも新しい。

遺物は古錢12枚（至道元寶・祥符通寶〔又は元符通寶〕・天聖元寶・皇宋通寶・嘉祐元寶・熙寧元寶・元豐通寶・嘉定通寶・皇宋元寶）が出土している。

【墓跡】（第23・42図）

西部で21基発見した（註5）。これらには火葬の痕跡はなく、すべて土葬墓と考えられる。このうちSP216で木棺の痕跡と思われる腐食した木片を確認しているが、それ以外に棺などの埋葬施設ではなく、ほとんどが直葬であったと判断できる。墓壙の平面形は隅丸長方形あるいはそれに近似しており、長軸の方向もSP216を除き全て北で西に偏するなどの規則性が認められる。埋葬の状況が明らかなものは、SP159～161の3基のみである。いずれも頭部を北側に向かって、横位屈葬の状態で埋葬されていた。副葬品は極めて少なく、SP146・147・150・154・155・156・187から古錢（元口通寶・永樂通寶・宣德通寶）、SP161から漆器椀、SP172から無釉陶器甕が出土しているのみである。



第22図 SK119断面図

4 まとめ

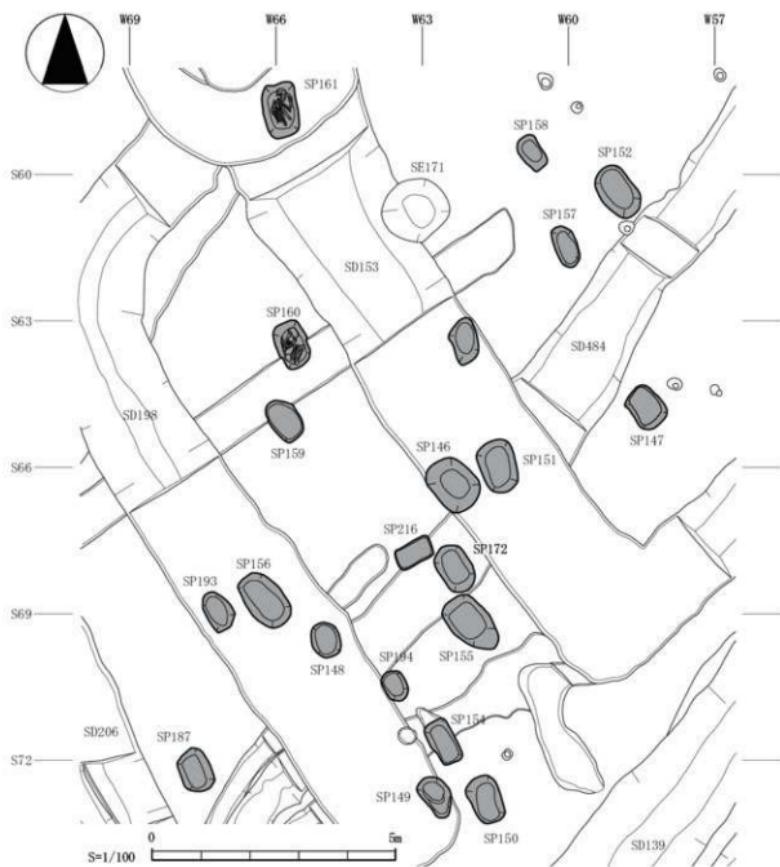
第1～3次調査で発見した遺構には、大規模な区画溝跡に囲まれた屋敷跡や土壤墓群がある。屋敷跡内部からは多数の掘立柱建物跡や井戸跡、土壤等を発見しており、国産の無釉陶器や施釉陶器、中国産の青磁・白磁、木製品、石製品、金属製品などが出土している。遺構の重複関係をみると、全調査区を通じて幅1m前後の小規模な溝跡が巡る屋敷から、幅3m前後の大規模な溝跡によって区画される屋敷群へ変遷するといった共通性が窺える。ここでは、遺構の新旧関係および出土遺物の年代観から、小規模な区画溝によって構成されるⅠ期（13世紀～14世紀中葉頃）と、幅2～3mの大規模な区画溝を巡らせたⅡ期（15～16世紀頃）に大別し、さらにⅡ期については調査区西半部の様相が大きく変化する16世紀を境に、2小期（a期：15世紀～b期：16世紀）を設けた（註6）。

Ⅰ期（第25～27図）では、E区北東部からA区南部・C区西部・B区中央部にかけて、幅1m前後の小規模な溝跡や土壤が確認できる。このうちE区北東部で発見したSD118・179・180・181・182とSD140・141・142・488は鉤型に接続する一連の溝跡であり、屋敷の南西部を区画するものと判断できる。

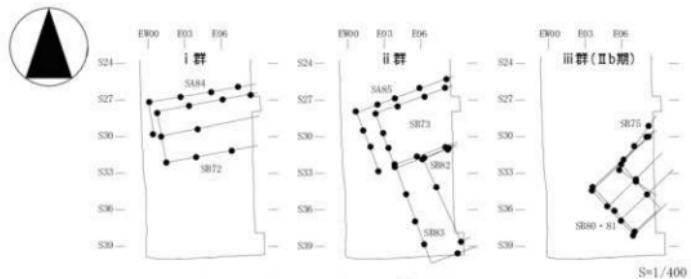
Ⅱa期（第28～31図）では、調査区全域で屋敷跡を6区画（屋敷1～6）確認した。各区画で概ね2

註5：人骨や副葬品が確認できないものもあるが、遺構の形態が類似していることから、ここでは全て墓跡と判断した。

註6：今回の調査では明確な遺構は捉えられなかったが、白磁碗及び無釉陶器甕、甕には12世紀代に遡るものもあることから、周辺にその頃の遺構が存在する可能性もある。



第23図 第3次調査E区西部土壤基群ほか平面図



第24図 第3次調査A区建物跡変遷図

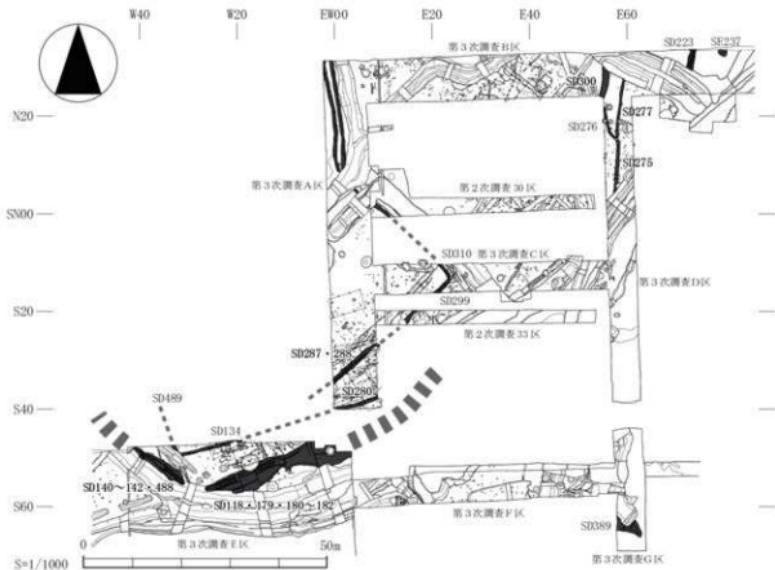
～4時期の変遷が認められ、このうち最も新しい段階のものはいずれも15世紀後半頃のものである。

II b期（第32～36図）では、屋敷跡を6区画（屋敷①～⑥）確認した。ほとんどがII a期から継続して営まれているが、西端部の区画は廃絶したものと考えられる。また、II a期の屋敷3南西部については、区画溝を埋め戻した後に墓域が営まれるようになる。II a期同様、各区画で2～4時期の変遷を確認しているが、出土した遺物に17世紀代のものが認められないことから、その頃には完全に埋没していた可能性が高い。

なお、A・E区で発見した掘立柱建物跡についてみると、建物として組み合わない柱穴も含め大部分がI期の造構より新しいことから、概ねII期に相当するものと考えられる。このうちA区では、方向が東で10度前後北に傾くもの（i群）と、20～30度傾くもの（ii群）、40度以上傾くもの（iii群）の3群に分けられる。造構の重複をみると、i群（SB72・SA84）→ii群（SB73・SA85）、ii群（SB82・83）→iii群（SB75・80・81）といった新旧関係が確認でき、i群→ii群→iii群の変遷が推測できる（第24図）。iii群については建物の新旧関係で最も新しいことからII b期の可能性が高いものの、i・ii群の年代については明らかでない。E区ではSB88がI期に相当する以外はいずれもII期のものと推測されるが、年代や変遷を把握することはできなかった。各トレーナーで発見した井戸跡や土壤については、年代を推測できる遺物が出土した一部を除き、どの時期に該当するか不明なものが多い。

（引用・参考文献）

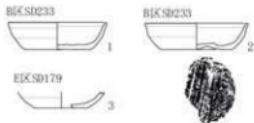
- 田中 則和「陸奥国「国府城」の考古学的探査」『鎌倉・室町時代の奥州』2002
斎藤 利男「多賀国府の都市プラン」『よみがえる中世7』1992
中野 睦久「生産地における編年について」全国シンポジウム『中世常滑焼をとて』資料集 1994
中野 睦久「常滑・渥美」平成17年度文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究-学融合を目指す新領域創設-』第5回公開シンポジウム『中世窯業の諸課題へ生産技術の展開と編年へ』発表要旨集 2005
永井久美男『中世出土鉢の分類図版』2002
藤沢 良祐『中世漸戸窓の研究』2008
松本秀明・野中津志子「中野高柳遺跡と竹ノ内遺跡の概観」『中野高柳遺跡IV』宮城県文化財調査報告書第204集 2006
森田 敏『14～16世紀の白磁の型式分類と編年』『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会1982
石巻市教育委員会『水沼塙跡発掘調査報告』石巻市文化財調査報告書第1集 1984
鎌倉市教育委員会『今小路西遺跡（御成内学校内）発掘調査報告書』1990
佐助ヶ谷遺跡発掘調査班『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』1993
三木木町教育委員会『多賀田塙跡調査報告書』三木木町文化財調査報告書第4集 1978
仙台市教育委員会『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第140集 1990
仙台市教育委員会『洞ノ口遺跡』仙台市文化財調査報告書第281集 2005
多賀城市教育委員会『大日南・門開田地区試掘調査』『市川橋遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第35集 1994
多賀城市埋蔵文化財調査センター『新田遺跡（第4・11次調査報告書）』多賀城市文化財調査報告書第23集 1990
太宰府市教育委員会『太宰府塙跡XV－陶磁器分類編一』太宰府市の文化財第49集 2000
東北中世考古学会『中世東北の土器・陶磁器』2003
東北歴史資料館『伊豆沼古窯 焼刈八室窯発掘調査報告書』東北歴史資料館資料集1 1979
日本中世土器研究会『中世土器の基礎的研究ⅩⅠ』1996
日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』No.1～No.5 1998
宮城県教育委員会・東北電力株式会社『一本杉塙跡群』宮城県文化財調査報告書第172集 1996
宮城県教育委員会『中野高柳遺跡IV』宮城県文化財調査報告書第204集 2006
北條中世土器研究会『北條の漆器考古学－北條とその前後－』第10回北條中世土器研究会記念特集号 1997
出土軽質研究会『中世の墓と瓦』第16回出土軽質研究会資料 2009



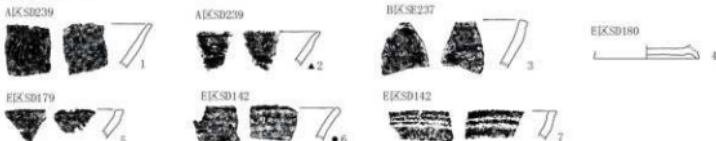
[青磁・白磁]



[かわらけ]



[無釉陶器鉢]

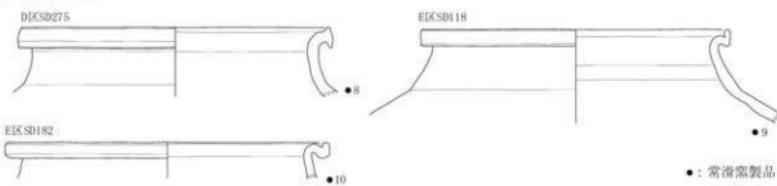


●: 常滑窯製品
▲: 湿美窯製品

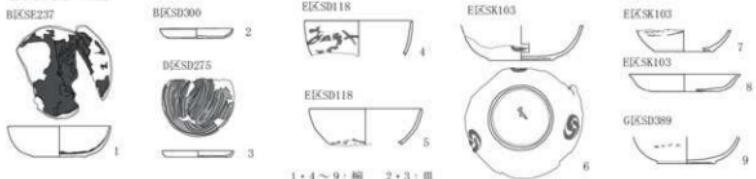
S=1/6 0 20cm

第26図 I期遺構出土遺物（1）

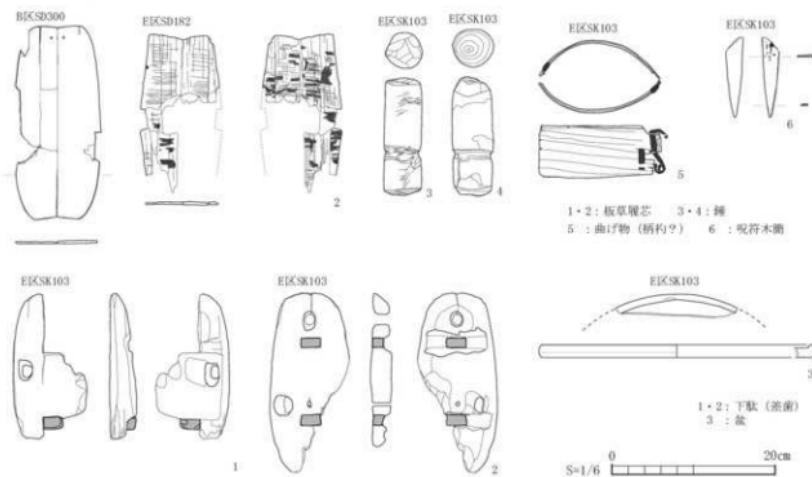
[無釉陶器甕]



[漆器碗・皿]



[その他木製品]

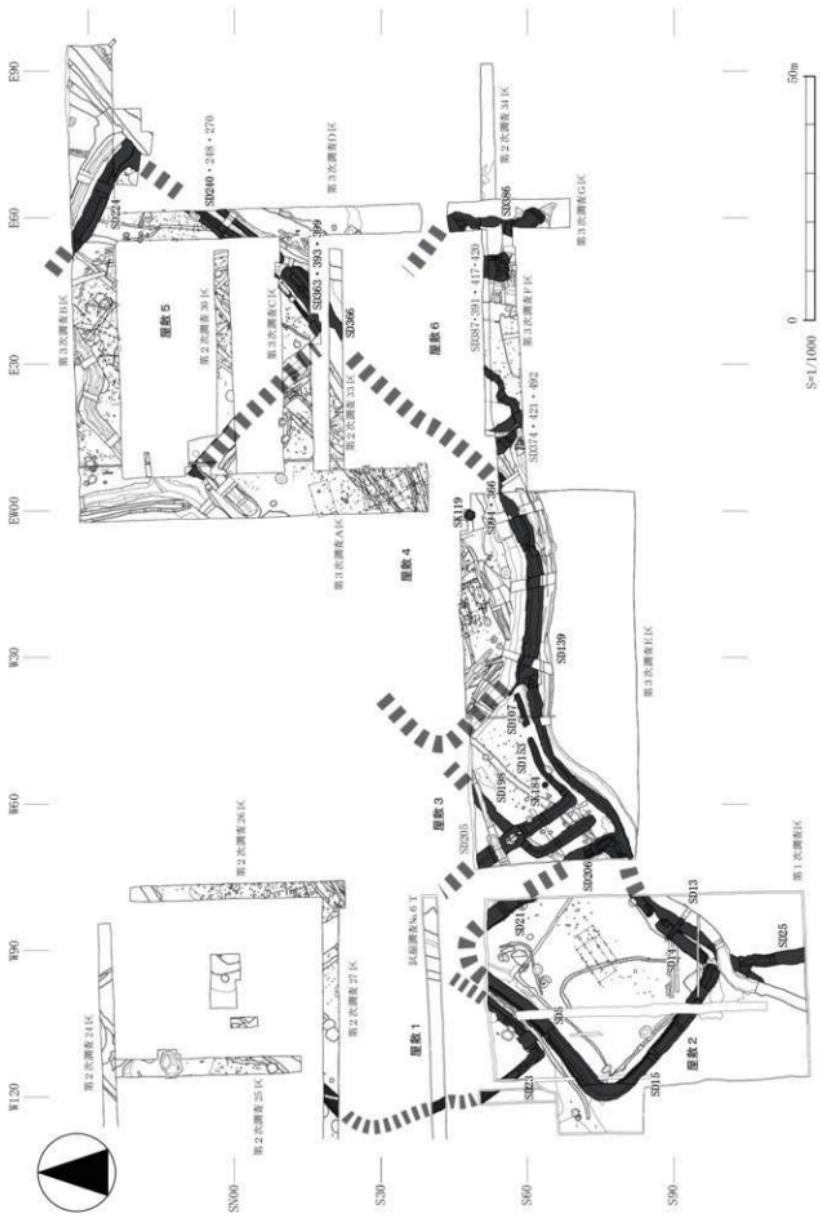


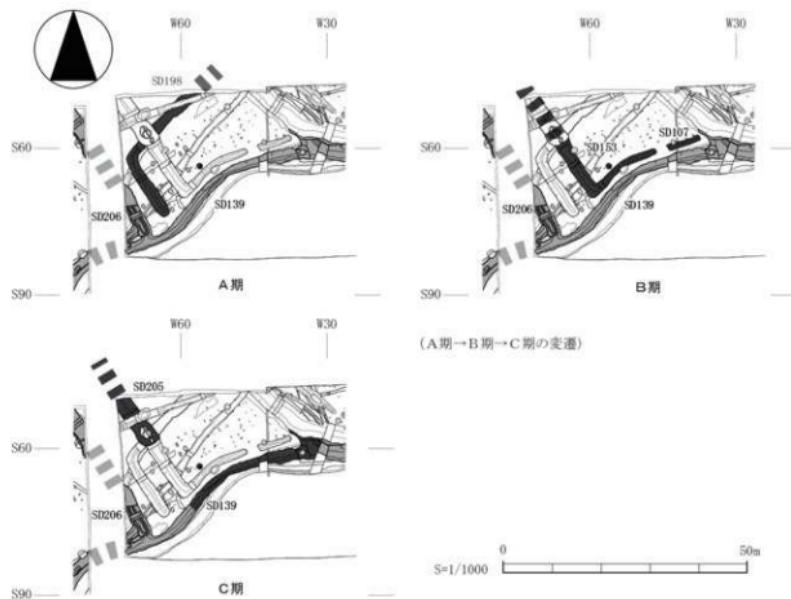
[錢貨]



第27図 I期遺構出土遺物（2）

第28图 第II a期遗模模式图



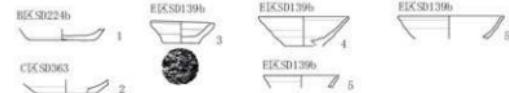


第29図 II a 期屋敷3変遷図

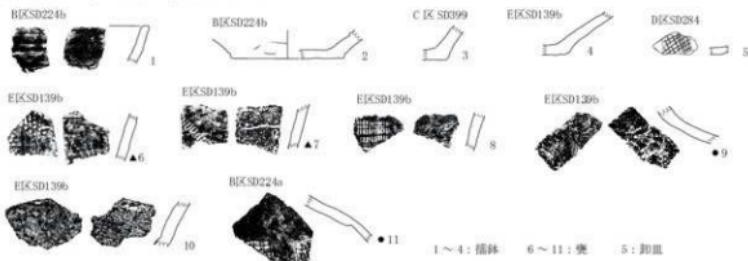
[白磁碗]



[かわらけ]



[無釉陶器鉢・壺、施釉陶器卸皿]

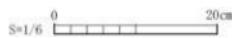
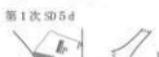


1~4: 鉢鉢 6~11: 壺 5: 卸皿

●: 常滑窯製品

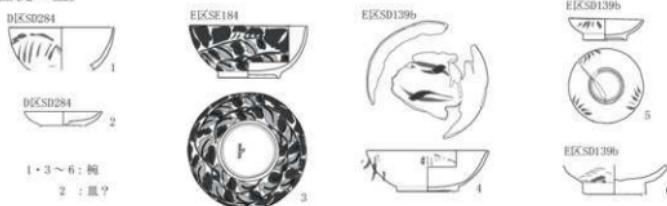
▲: 濱美窯製品

[瓦質土器擂鉢]

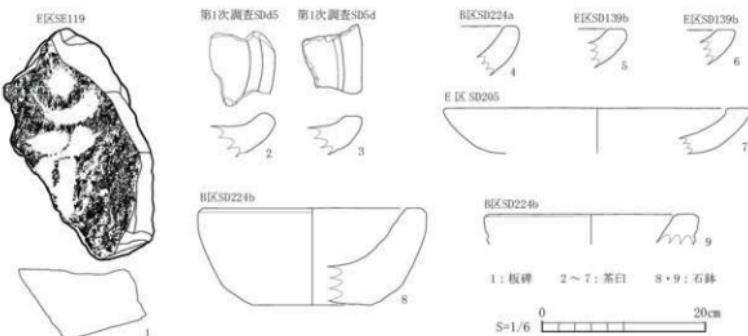


第30図 II a 期遺構出土遺物 (1)

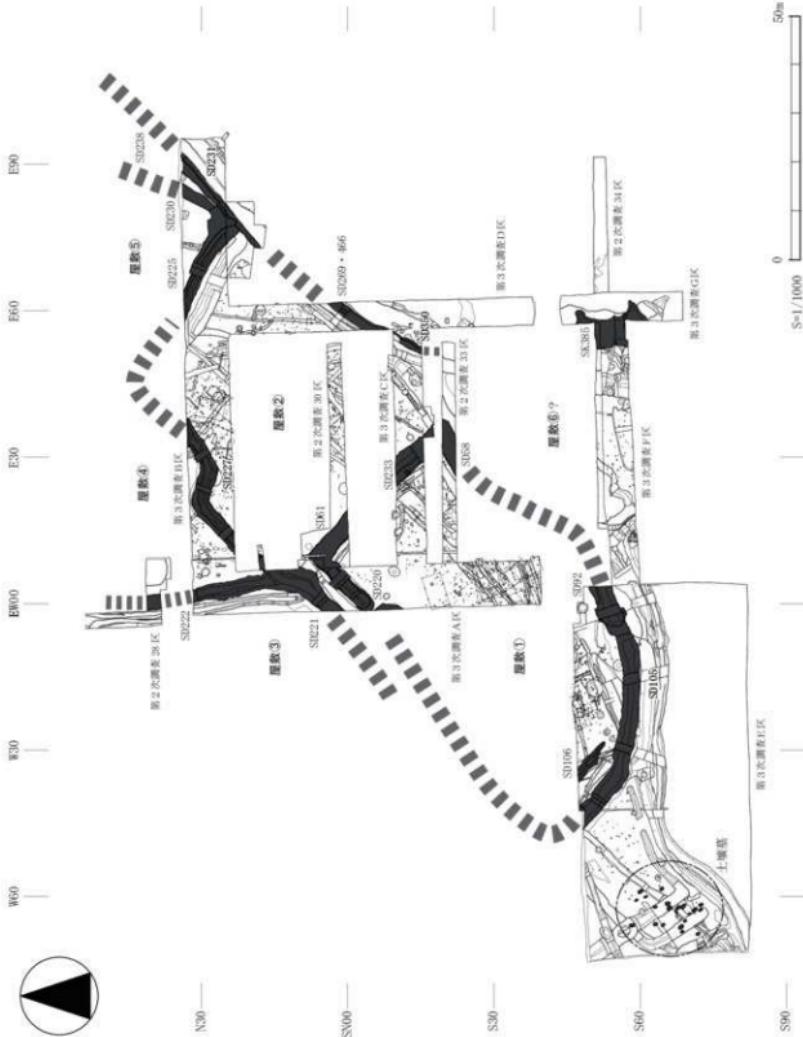
〔漆器椀・皿〕



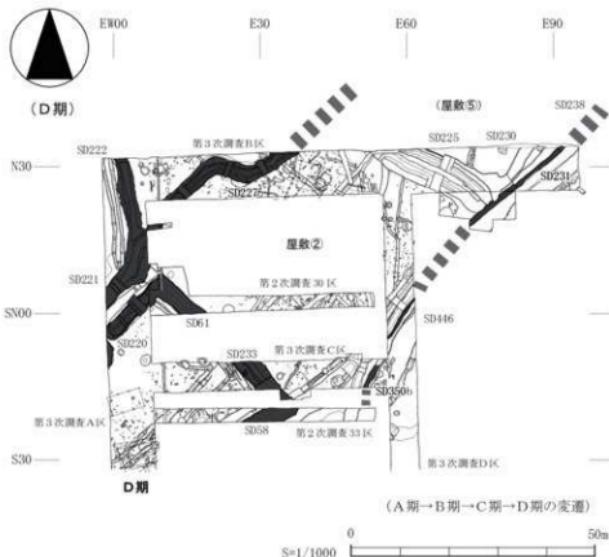
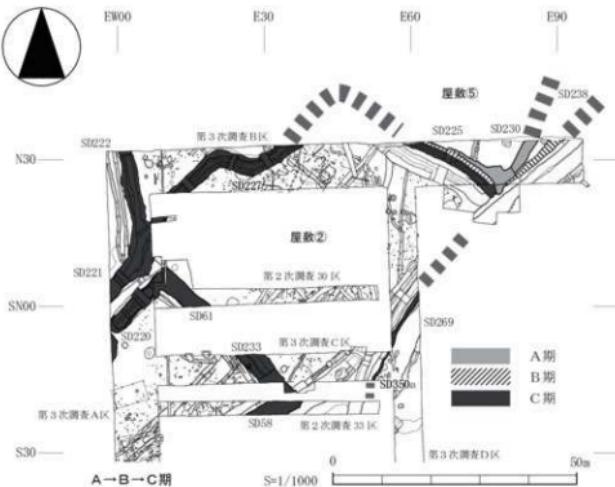
〔板碑、石製品茶臼・石鉢〕



第31図 II a 期遺構出土遺物（2）



第32圖 第II b期遺構模式圖

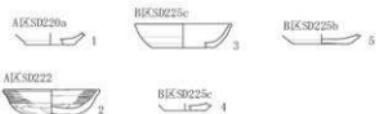


第33図 II b 期屋敷②変遷図

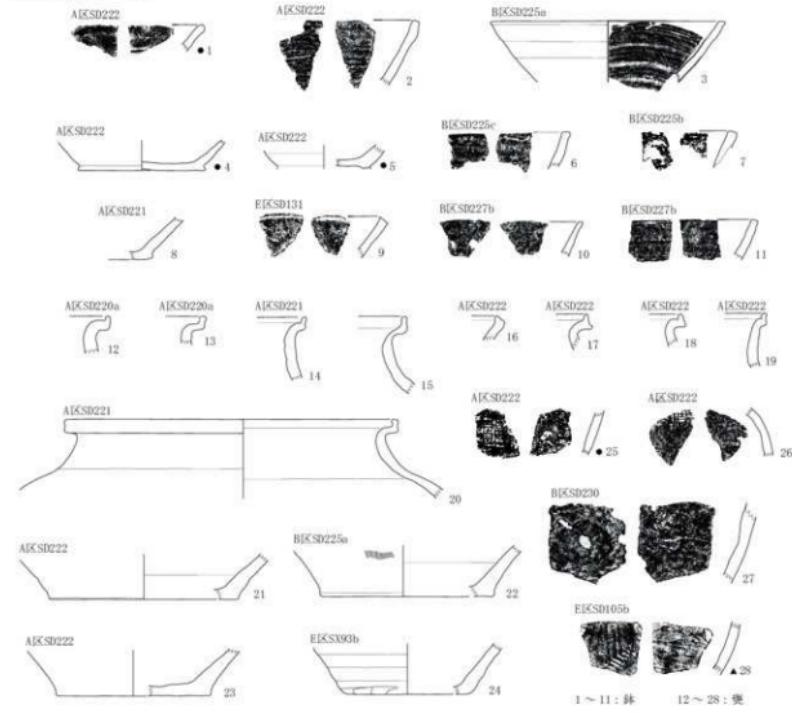
〔青磁椀〕



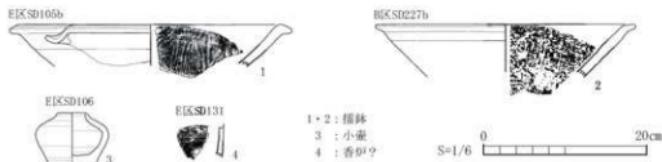
〔かわらけ〕



〔無釉陶器鉢・甌〕

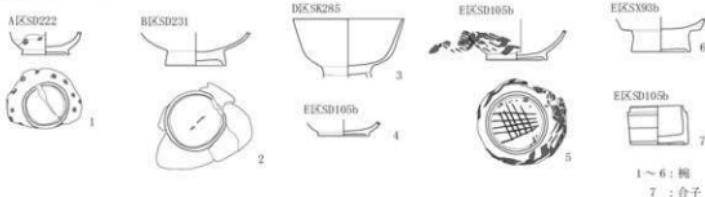


〔瓦質土器甌・小壺〕



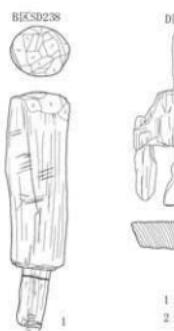
第34図 II b 期遺構出土遺物 (1)

[漆器椀・合子]



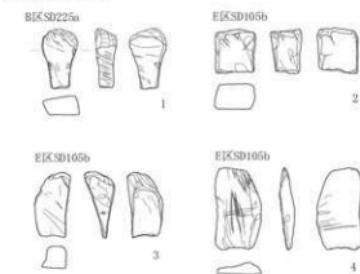
1 ~ 6 : 梵
7 : 合子

[木製品横槌・下駄]

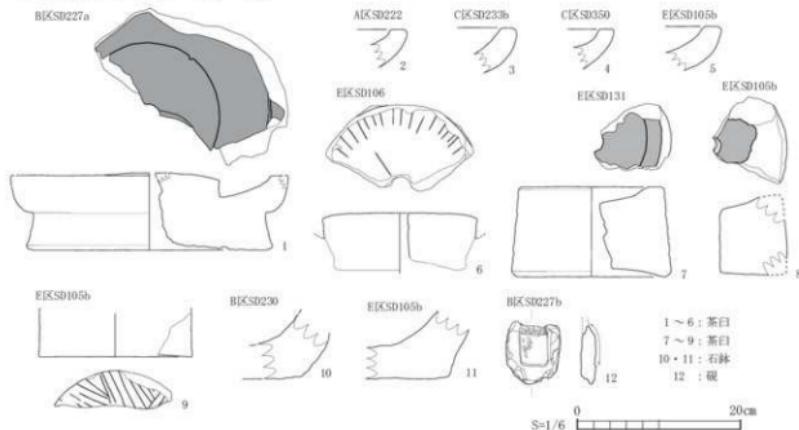


1: 横槌
2: 下駄 (差駄)

[石製品砥石]



[石製品茶臼・石臼・石鉢・硯]



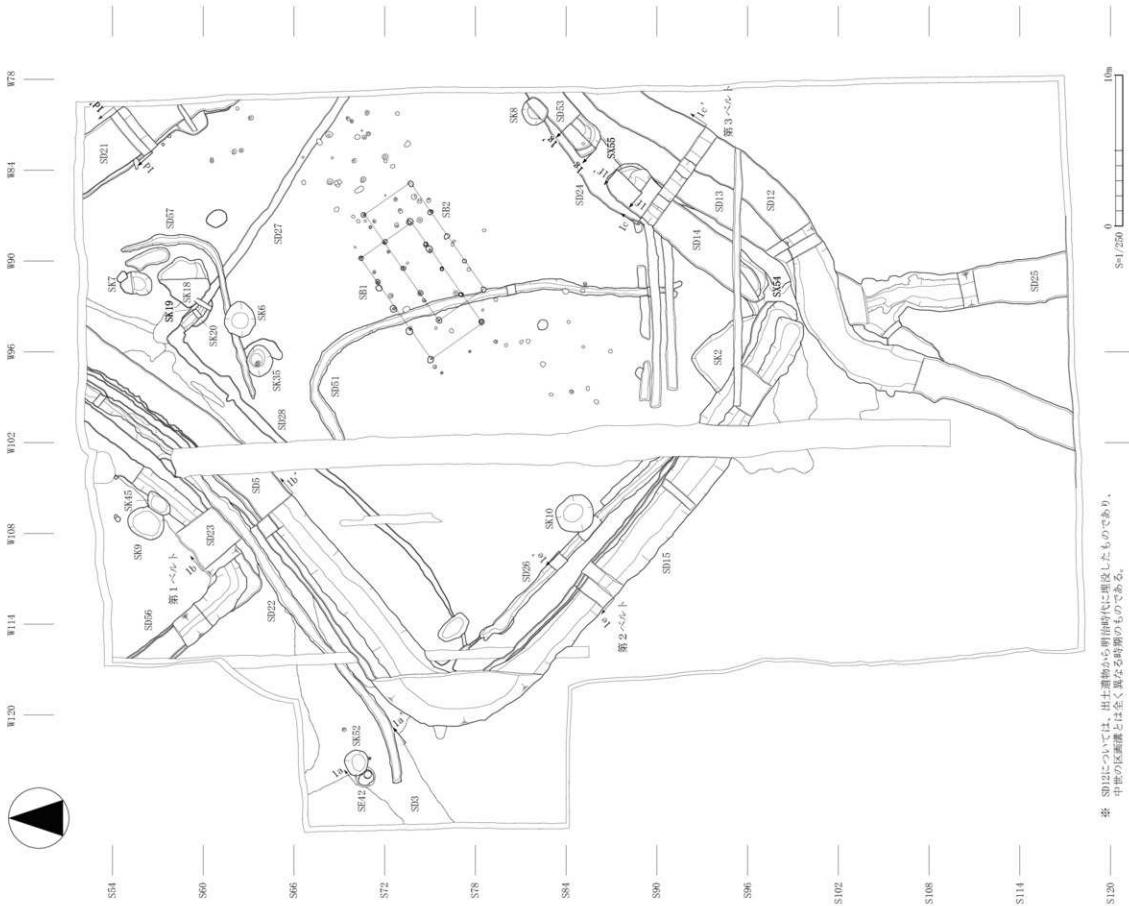
第35図 II b 期遺構出土遺物 (2)

[銭貨]

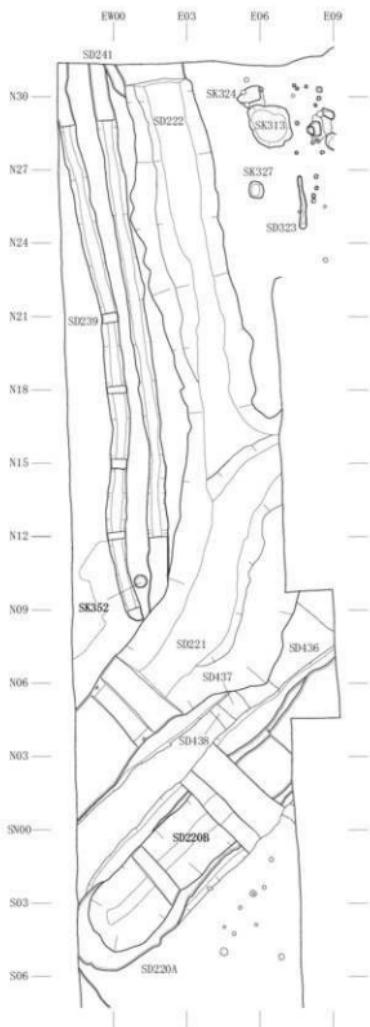
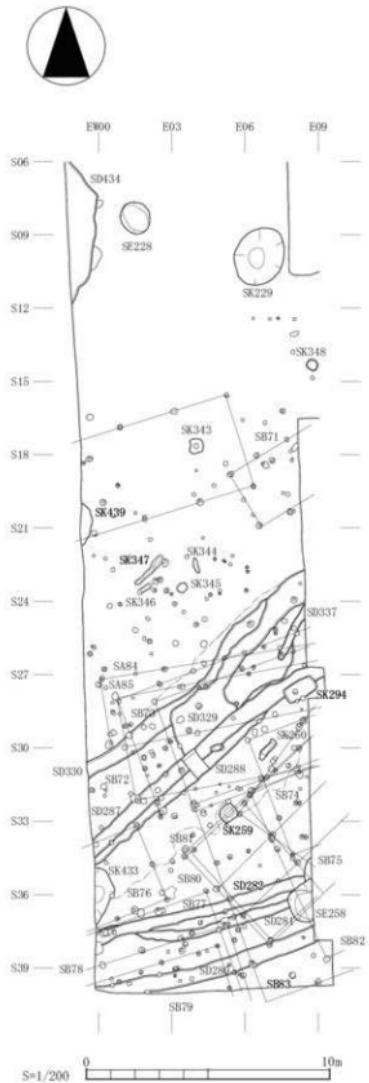


第36図 II b期構造出土遺物（3）

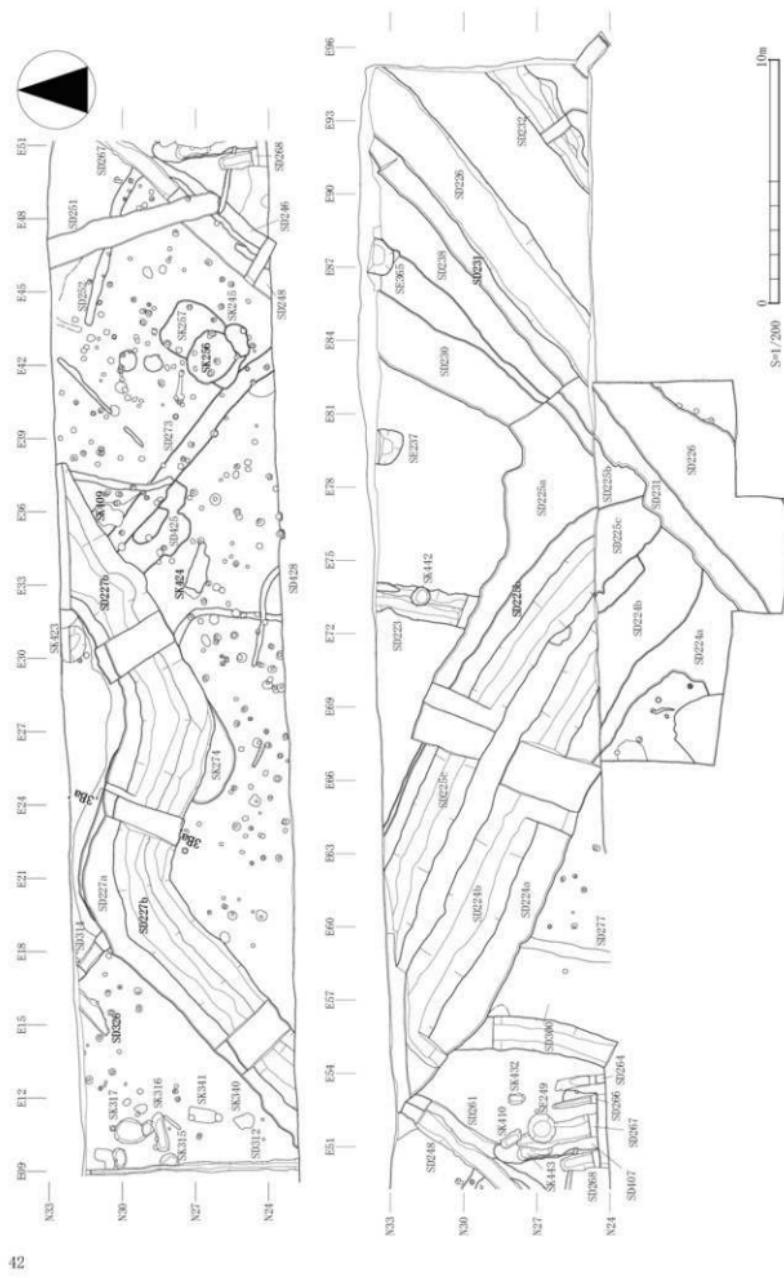
白



第37図 第1次調査坑遺構配置図

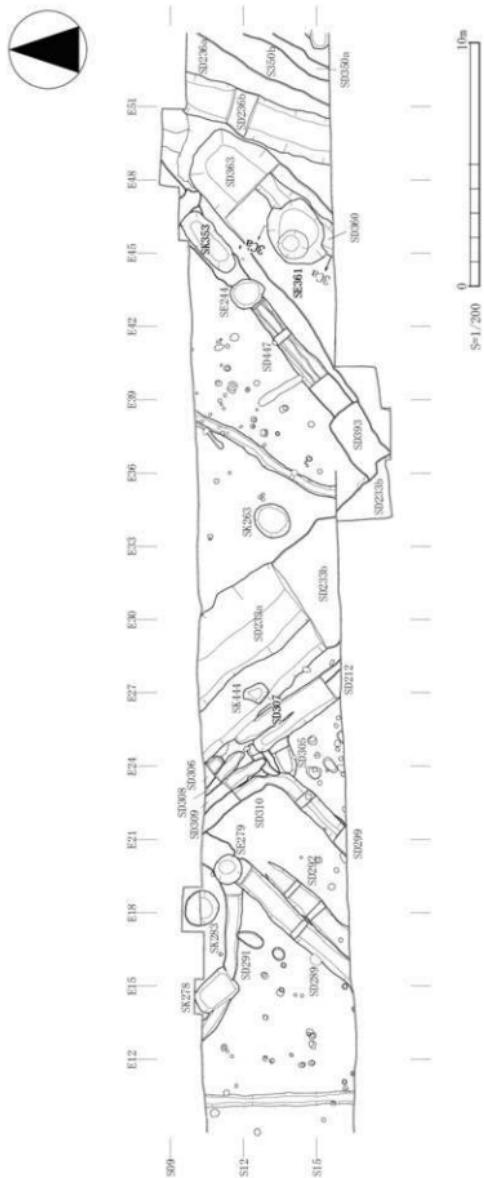


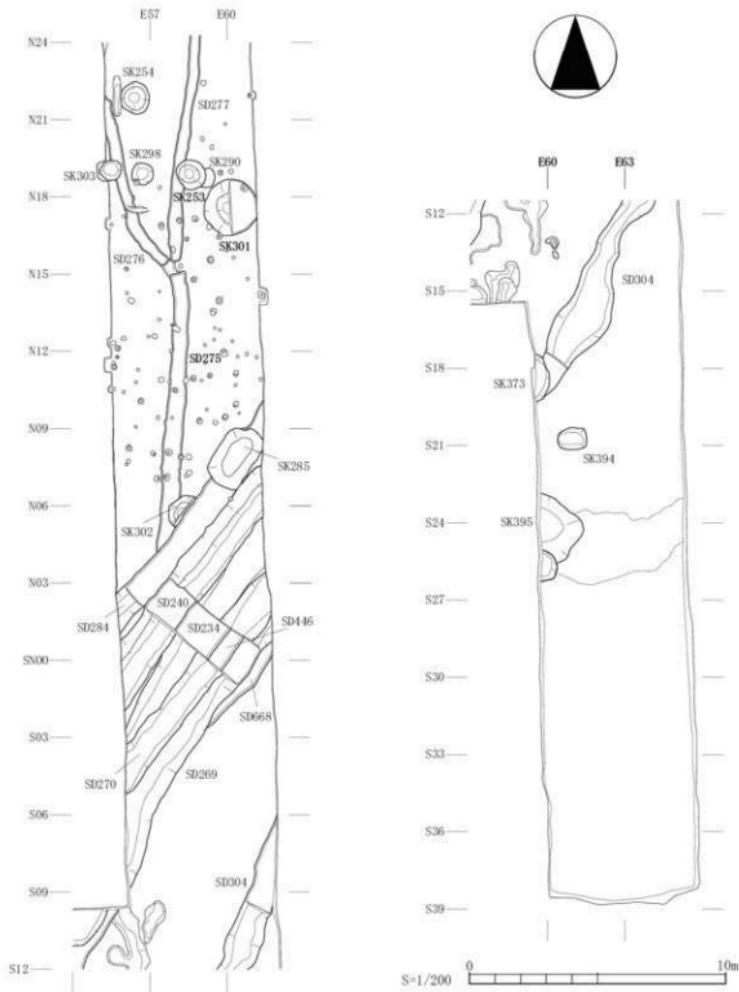
第38図 第3次調査A区発見遺構全体図



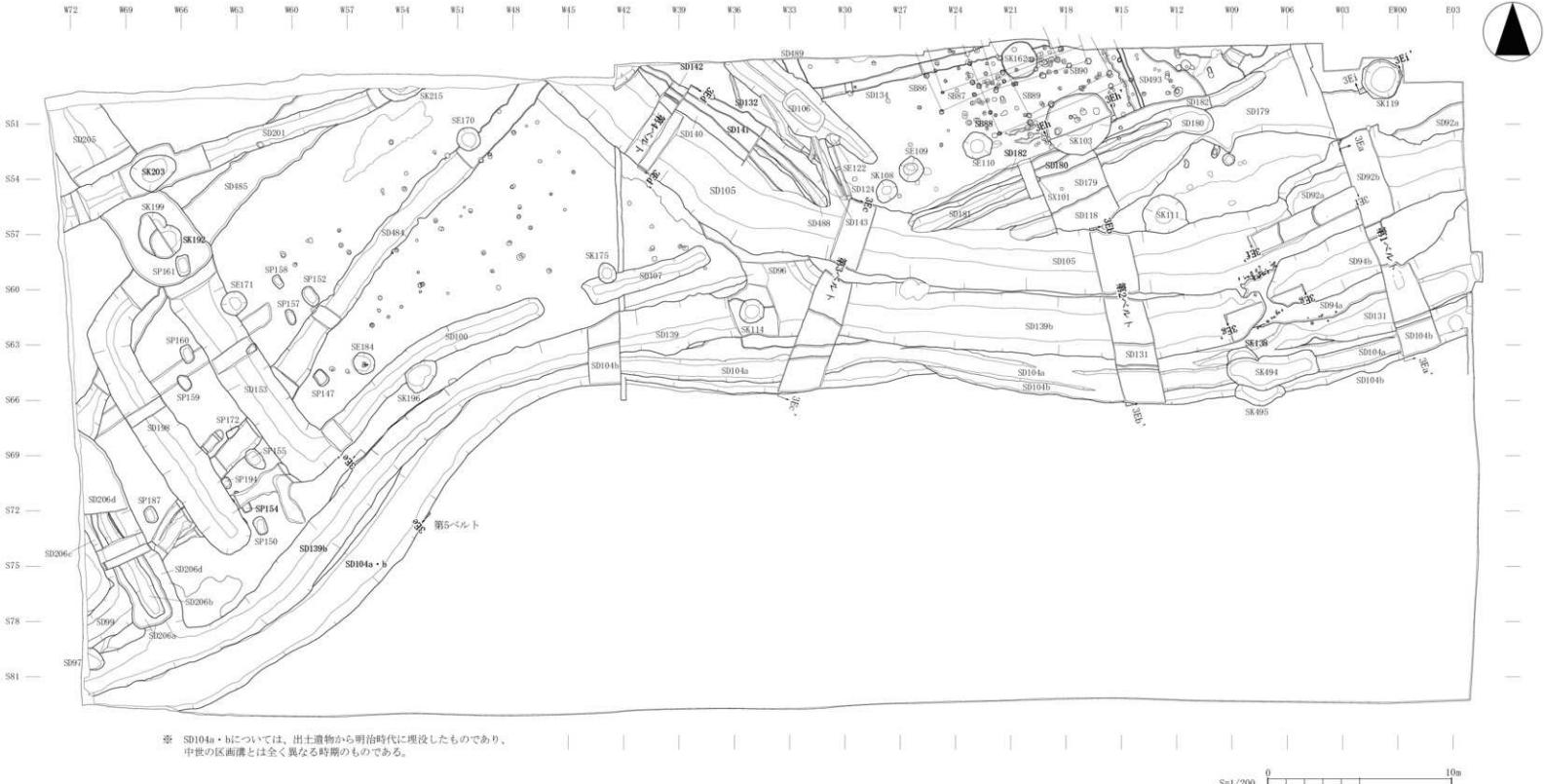
第39图 第3次调查B区免见道幅全图

第40図 第3次調査C区免見遺構全体図

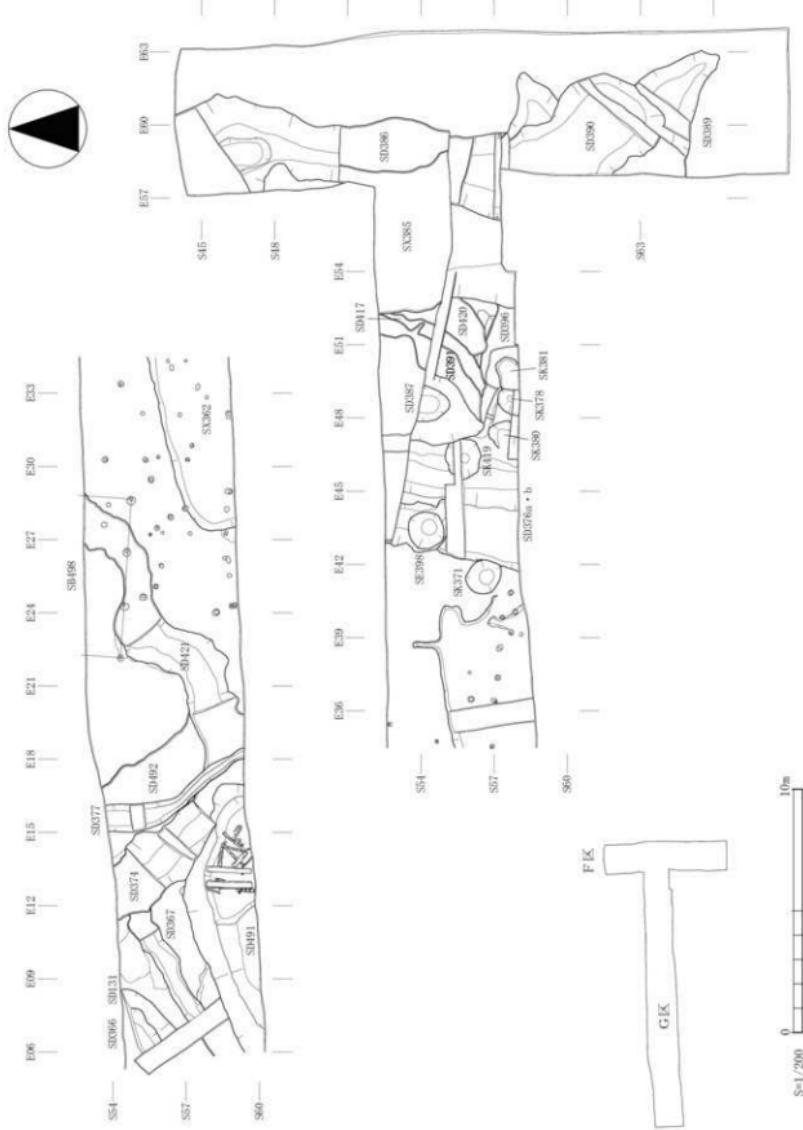




第41図 第3次調査D区発見遺構全体図



第42図 第3次調査E区発見遺構全体図



第43図 第3次調査F・G区発見遺構全体図



第1次調査区全景（北東から撮影）
人が囲んでいる範囲が中世の屋敷跡



第1次調査SB1・2棟出状況（北東から撮影）



第3次調査E区東半部遺構検出状況（西より撮影）



第3次調査E区東半部全景写真（南西から撮影）



第3次調査E区西半部全景写真（北東から撮影）



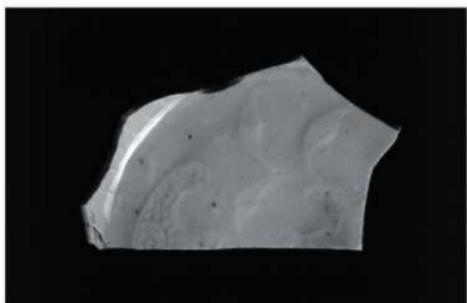
第3次調査E区
S P 159 人骨検出状況



第3次調査E区
S P 160 人骨検出状況



第3次調査E区
S P 161 人骨検出状況



第3次調査E区SK103出土白磁碗



第3次調査E区SE184出土漆器椀

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき 1							
書名	多賀城市内の遺跡 1							
副書名	平成22年度ほか発掘調査報告書							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第112集							
編著者名	武田健市、島田敬、相澤清利							
編集機関	多賀城市教育委員会							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL022-368-0134							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
留ヶ谷遺跡 (第6次)	宮城県多賀城市 留ヶ谷一丁目353-1	042099	18047	38度 18分 04秒	141度 00分 19秒	20100629	4m ²	無線通信 基地局建設
八幡館跡 (第5次)	宮城県多賀城市 八幡二丁目25-7	042099	18021	38度 17分 15秒	141度 00分 05秒	20100930 ~ 20101001	6m ²	薬品注入室 建設
大日南遺跡 (第1次)	宮城県多賀城市 高橋四丁目24	042099	18053	38度 17分 19秒	140度 58分 54秒	19940207 ~ 19940226	3,000m ²	区画整理
大日南遺跡 (第2次)	宮城県多賀城市 高橋四丁目・五丁目	042099	18053			19941101 ~ 19950120		
大日南遺跡 (第3次)	宮城県多賀城市 高橋四丁目	042099	18053			19950401 ~ 19950831		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
留ヶ谷遺跡 (第6次)	集落 城館	古代 中世	土壙					
八幡館跡 (第5次)	集落 城館	古代 中世						
大日南遺跡 (第1~3次)	集落 墓域	中世	屋敷跡、墓域	無釉陶器、施釉陶器 青磁、白磁、諺器、 古錢、板碑		15・16世紀の屋敷跡は、 大規模な区画溝を巡らせて いる。		
要約	留ヶ谷遺跡第6次調査では、中世の土壙の一部を発見した。							
	八幡館跡第5次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。							
	大日南遺跡第1~3次調査では、中世の屋敷跡と墓域を発見した。							

多賀城市文化財調査報告書第112集

多賀城市内の遺跡 1

—平成22年度ほか発掘調査報告書—

平成25年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
宮城県多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368-0134

発行 多賀城市教育委員会
宮城県多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368-1141

印刷 株式会社 工陽社
宮城県塩竈市尾島町8番7号
電話（022）365-1151
